

明治三十九年十二月二十日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第四拾六號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第四十六號目次

論 說

○想像の餘地……………其 月 生
○校風と制裁を論ず……………中山 隆吉

雜 錄

○感想錄……………平松 萍水
○妄語……………三 郎
○寒燈錄……………あ、ま、

文 苑

○陸軍大尉大田君碑銘……………村上 函峯
○盾守る少女……………静 池 庵
○花づくし……………江南 白雪
○伶人……………渡 邊 三 庸
○遣憤二章……………秋 水
○短歌……………
野 菊……………其 月

みぞれ集……………和 歌 會

○俳句……………判者 紫影 先生

十番句合……………
黃菊白菊……………

秋雨樓小集……………白 水

雜吟……………
四高俳句會即吟互選……………

北辰時評

○河合良成君に與ふる書……………藤 井 悌

○何ぞや

○何の値ぞ

○何の謂ぞ

○管見者

○軟文學者に與ふ

○鞭聲錄

○覺醒錄

雜 報

○南下問題○第十四回陸上運動會記事○野球部

報○再び南下問題について

○方言について 附 金澤市の方言集 へ、な、生

附 録

YELL(應援聲)を募集す

我南下隊は來春を以て征途に上らむとす、應援聲なかるべからざる也。應援は神聖ならざるべからず、亂暴なる應援は吾人斷して之を取らず、此れ應援聲の須要なる所以なり、吾雜誌部は各運動部に在りて廣く此を會員に募る、勇壯にして音調の滯滞せざる者を撰べ。豪快にして四高的校風を表明せる者を撰べ。而して花笑ひ、鳥歌ふの好期、關西の原野に於て吾應援聲をして無終の響あらしめよ。

切期限二月十五日控席内投書函に投入

雜誌部委員

校歌及び原稿募集

校歌集を著る者僅に二三。吾人啞然たらざるを得ず、諸君は熱血を有す、熱血を歌はば此れ即ち校歌なり、易々の業のみ。諸君は未だ歌はすして歌ふ能はずとなすは大に誤れり、我校歌は文の美なるを貴ばず、辭の秀麗なるを欲せず、只諸君の熱血を欲す、赤誠を欲す。

原稿校歌ノ切 一月十五日限

雜誌部委員

北辰會雜誌第四拾六號

論說

想像の餘地

其 月 生

人は自惚の動物である。見給へ、十が十まで本で讀み、人から聞いた話でも、さて之を人に語るとなれば、尾鰭を附け蛇足を加へて、さも自分の物らしく吹聴するではないか。若し十のものゝ八九まで書いてあるか、七八まで聞かされたかして、其の一二乃至二三——勿論それは態と省略せられてゐるのであるが——を自分で想像し得た其時こそ、大發見大發明でもしたかの様に、得々として喜色満面といふ大騒ぎ。——文學はこの弱点につけこまねばならぬ。

先づ和歌に餘韻餘情といふものがある。まさしく此の弱点につけこんだもの。例へば、
渡つ海の何れの神を齋はばか往くさも來さも船の早やけむ (萬葉)

我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世經ぬらむ (古今)
など態と疑問の矢を放ち、

八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を (古事記)

遂にゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを (伊勢物語)
など態と詠嘆の意を残し、

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし (業平)

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らぬ根さへ枯れめや (同上)

など態と廻して反對より云ひ、

我が背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも我なけなくに (万葉)

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして (伊勢物語)

など態と語句を省略せる、いづれも讀者に想像の餘地を興へたものである。修辭學のいはゆる設
疑法、詠嘆法、反語法、舉隅法、省略法などは全く此の主義に外ならぬ。

面白い話がある。或る殿上人の子息、「風の吹き來るぞ。燈火も消えなむ。障子たてよ」と云ひけ
れば、父君ことに怒り玉ひて、「さやうなる言葉づかひしては歌はいかでかよむべき」とむづかり
玉ふ。後日に侍臣その理を問ひ奉りしに、「ものはつくしていふべきものにはあらず」との玉ひし
とぞ。(花月草紙)

白樂天の琵琶行に、「此時無聲勝有聲」といふ句がある。俗諺の「言はぬは言ふにいやまる」と
とは此の事だ。歌でも詩でも俳句でも俗語でも、苟も人口に膾炙するものを吟味し玉へ、必ず此
種の工夫がしてある。翁の、「古池」の蛙の音は全く聽く人の感想如何に一任し、「枯枝」の鳥は鳴
かうが鳴くまいが人々の勝手だ。但し茲に一つ注意すべきは、歌でも詩でも餘りに省略其の程を

過ぐれば、殆んど謎の様になつて了ふ。近來新派の和歌に此の弊が多い。誤解せられぬだけのヒ
ントは必要だ。

終りに小説の事に就て一言して置く。昔の小説と云つたら、一何々由緒之事といふから、目出度
目出度の大團圓に至るまで、それはそれ可憐なもの、一糸亂れず一毫損せずといふ有様であつた。
が小説は科學上の著述とは違ふ。加之讀者は何時までも子供では無い。左様嘯んで含められずと
もの事だ。で近來の小説は頭も尻もない殆んど胴ばかりのものとなつた。子供は「もうそれでた
仕舞なの？」と怪しむ。老人は「何だ尻切蜻蛉の様に！」と罵る。併し吾々進歩した讀者(?)は其
處に却て多大の興味を感ずるのである。た宮があの後死なうが生きやうが、武夫がそれから立身
しやうが墮落しやうが、そんな事まで一々知る必要は無い。あるなら各自に想像するさ。

源氏の著者は遠にわらい。千年以前早くも此の眞理を了解して居た。「雲隱」といふ巻の名のみを
存して源氏の最後を態と記せずにある。維摩の一默は則ち千言万答。然るをヤレこれは紛失した
のだ、ヤレこれはどうしたのだと騒ぎちらして、御苦勞にも僞本まで作つて補つてゐる學者さへ
ある。不見識な事ではないか。宇治十帖の主人公を見ても大凡わかりさうなものに！
かく想像の餘地を讀者に與ふる事が必要だと云つた處で餘り甚だしきに過ぐれば、前にも云つた
通り、雲纏む様なものとなる。過不及な程度——これが骨だ。

校風と制裁を論ず

中山 隆 吉

是を大にしては、一國に國體あらざるべからざるが如く、是を小にしては、一個人に人格あらざるべからざるが如く、學校には校風なかるべからず。純美なる校風は之れ吾人の精神的生命の盆涌する源にして、校風の無き所は、其處に吾人の理想なく、希望なく、活動なく、進歩なき所なり。國民としては、金甌無缺の國體を以て、無上の誇となし、個人としては、人格の修養を以て、人生窮極の目的として悔いざる吾人は、小國家として、小天地として、青春天真の快樂を享了する學校に於て、純美なる校風の發揚を欽望する、固より其の所にして、國民としての愛國の情の如く、個人としての人格憧憬の如く、人生崇高の情操なりとす。

靜に默想するの夜、仰いて天を見れば、玲瓏曼なかりし蒼穹は、瞬く隙に叢雲現はれ、行く手を照す北辰の前途を暗澹たらしめ、伏して海に臨めば、瑠璃を流す滄溟には、暗流滔々として千尋の底を驅り、遂に平和の鏡面を破壊し、怒濤天に冲せむとするの光景は、歴々として余の腦裏に映す。余は、之れ、恐らく余の主觀的迷想ならむと信ず、否な、迷想ならむことを願ふ轉た切なり。然れども、校風發揚の聲喧しき反面には、或るものの流れ、或るものの動くは事實に近きが如し。余や校風に戀々たる一日の故に非ず。此の際に當りて、校風と、及び此到達する手段なる、制裁、を論じて余が卑見を公にする、強ち無益の事にあらざるべく、讀者若し、閑文字、戯文字

を以て視る無くんば幸なり。

吾人は是をスウェーデンブルグの説に聞く、曰、有機組織は凡て同一の分子より成る、即ち肺臟は無限に小なる肺臟より成り、腎臟は無限に小なる腎臟より成ると。此の假説の眞偽は暫く不問に附し、兎に角、半面の眞理を表すや明けし。史を繙く毎に、深く余の心を動かすものは、奈破翁時代の佛蘭西國民は、皆之れ小奈破翁にして、クロムウエル時代の英國國民は、皆之れ小クロムウエルなりし事實なり。斯くして校風も亦、所詮、個人の人格の修養を前提とせざるべからず。吾人各々校訓を服膺し、自ら反省し、切磋淬勵以て崇美なる人格を涵養せば、之れ、北斗爛々として、暗黒の天地を眩耀し、北辰校風は最も純美なる貌に於て發揚するの時なりと言ふべし。

然りと雖も、斯かる黄金時代は之れ吾人の輒もすれば良心の羈絆を脱して跳梁せむとする、情性に一任すれば、永遠の未來に期せざるべからず。否な否な、彼のルーソーの制裁なく束縛なき、自然状態を以て黄金時代とせし如く、吾人一步を進むれば、黄金時代の影法師は二歩退くものなり。是に於てか、吾人は相互に覺醒誘掖し、止むなくんば、公明正大の制裁に據り、懲戒鞭撻して以て、吾人の理想に歩を進めざるべからず。斯くして吾人は、校風と制裁の問題を得、更に、制裁を以て、校風を完全に發揚する必然の手段なり、との斷案を得たり。

然り、校風の養成は目的なり、制裁は手段なり。「目的は手段を撰ばず」のマキャベリ主義は、之を、權謀術數、爪牙相研ぐ、國際間に行はるるを見る、或は可なるべし、苟も神聖なる學校に於て、智情共に、水準を超越すべき吾人にありては、其の目的の神聖なると共に、其の手段も實に

神聖ならざるべからず。言を換て言はく、吾人の理想し、憧憬する校風の養成は、吾人崇美の至情より、溢れ出でしものたると同時に、吾人が以て據らむとする制裁も、公明正大、名義上、及び事實上、明、日月に比すべく、一點も他の非難を容るべからざる事此れなり。

余は此の意味に於て、制裁は全團躰の公の手に依りて行はれざるべからざるを主張す。私の制裁断じて不可なり、獨り完全に制裁の目的を達し得べからざるのみならず、之が及ぼす害毒に至りては、實に大なるものあり。試に私團躰の制裁の缺點なるもの二三を擧ぐれば。

一、公明正大の態度に出づる能はず。蓋し、制裁の制裁たる所以は、制裁者の數の多少に非ず、其の標榜する聲の大小に非ず、公が私に對する關係なればなり、全く其の位地を異にせる兩者の、關係なればなり。私の制裁は、其の標榜する名は美なるにせよ、其の心事は私情なきにせよ、之を理性の大眼目より見れば、畢竟、同地位にある優者が劣者の權利を侵犯せしと、見るの外なく、自ら濫りに、制裁の美名を用ふ、抑も亦烏乎がましからずや。

二、制裁者と被制裁者との道義的資格に於て、果して正反對の位置に立たしむるだけの參商ありや如何。苟も、他を矯正せむとす、之れ蓋し、小乗を解脱して、大乘に入りたる底の人たらざるべからず。熟々反省すれば、自家の胸裏に聳峙する惡魔にたに鐵拳の制裁を加へ能はざる身の、如何にして人の身に制裁を加へ得べき。彼の判檢事が國家の機關として公權を行ふが如く、團躰の機關として制裁するに非れば、道徳的絶對の價値に於ては、遂に五十歩百歩に非ずや。

三、私團躰の制裁にして、万一、其の當を失し、若しくは、他の誤解を招くが如きものあらば、勢ひ、反對の團躰結社を生ずべく、是等若し、隱に相對拒し、陽に相衝突するが如きことあらむには、之れ明に、平地に旋風を呼び、砥海に波瀾を起し、暗愴晦暝、神聖なる學校を驅りて、紛々たる比周朋黨の巷に投ずるものなり。不幸にして不健全分子、霸を唱せむか、實に由々しき大事にして、幸に健全分子勝を制するも、權力の集る所、權勢の鍾る所、其所に僭主を生じ、一部の跋扈を來す恐なしとせす。

斯くして、私の制裁否なり。若し夫れ鐵拳制裁の如きに至りては、断じて私の手にて行はるべきものに非ず。余は然る所以の理を、具體的に明瞭にせむが爲め、私の團躰が、鐵拳制裁を敢行せし、極端なる場合を想像し、假定し、之を批評攻撃して以て、反面より、正邪黑白のある所を明かにせむとす。蓋し火の熱きを教ふるには、先づ水の冷なるを教へ、雲の白きを示すには、先づ炭の黒きを示す必要あればなり。

某校に校風の發揚を、高く標榜する一派ありて、之が説き集めて有志三四十人の、精神的團結を作り得たりとせよ。偶々某級に、該校の體面を汚したる破廉耻漢ありたりとせよ。因りて校風發揚の門途の血祭りとして、豫め何等の盟約なきに拘らず、忠告をだに與ふるなくして、白晝公然制裁を叫びて、公衆の眼前に於て、鐵拳を振つて之が頭に加へたりとせよ。人は、制裁としては余りに模糊不鮮明なるを以て、戯として是を默過したりとせよ。而して默過せられたるものは、戯を以て甘じ、私行を以て満足して得々たりとせよ。

讀者を乞ふ、余が斯かる没常識、没理性の假定、想像を、學校に於てなすを以て、學校の神聖を汚すものと、答むる勿れ。蓋し、事態極端なる場合を想像し、假定するは、一面益々、明瞭の度を増すの利あればなり。余は今、試に斯かる假定行動の不法、矛盾せる点を指摘せむか。

第一、明に國家の法律の精神に反す。抑も鐵拳制裁とは、腕力を以て人を匡正するの謂なり。人の子の頭に鐵拳を加ふるの事なり。豫め、最後の制裁として、鐵拳を用ひ得る事を、盟約するなく、突然、團練の力を以て、個人を毆打する、之れ明に、法律の忌む所なり

第二、斯かる團結は全學校を、名義上代表するには、余りに無形式に撰ばれ、事實上代表するには、余りに少數なり。名實共に全校を代表すべき行動を、敢て爲し、恰も、天より特別な使命を得たるが如く心得る到底、僭越の非難を免れ得ざるものとす。

第三、精神的團結は語を換ふれば、責任なき團結なり。凡て制裁は責任を豫想し、前提とす。特に、鐵拳制裁の如き、人權問題を惹き起すべき行動は、最も責任を明かにして、初めて、手を下すべし。無責任の團練を以て、有責任の行動を決行する己に矛盾と言つべし。

第四、既に高く、校風の發揚を標榜し、公の制裁を以て絶叫しながら、一朝、人之を戯として、默過すれば、甘じて、自ら戯を以て安んじ、其の正々堂々、制裁の爲めに行ひたる事を公表して以て、公明正大の所置を仰かざる、之れ明かに、名實相伴はざるものなりとす。

要するに斯かる行動は、矛盾に初まりて、矛盾に終るものなり。余は今、此の假想事件を論ずるに當りて、自ら、連想の禁ずる能はざるを、星享暗殺事件とす。初め、星享氏、放膽不諱にして、

拘束なく、屢々瀆職の嫌疑を招くの行動あり。道義界、先天的廢人の身を以て、東京市教育界を横行するや、伊庭想太郎、深く以て、市教育前途の憂となし、斬姦狀を公表して以て、星を市會議事堂に刺せり。伊庭の此の舉たる、何等の野心も無く、唯彼が心腔に溢騰せし、眞紅の熱血は、彼の理性を魅して、此の狂態を誘致せしのみ。然れども、國家の法律は之を默過する能はず、彼は今や、囹圄桎梏の人となりき。斯かる行動固より非文明なるや論なきも、彼が、斬姦狀を公表して、自ら責任を明かにし、身を犠牲として、欽して國家の制裁に服せしは、惟ふに彼が世の同情を得し所以ならむか。

前に余は、全々私の鐵拳を否認せり。然れども余は、玉石共に一火に附して、有ゆる鐵拳制裁を絶対に否認するものに非ず。今日の如く、淫靡風をなすの日に當りては、鐵拳制裁の如き、蠻的行動も、若し之を文明化立憲化すれば、毒草變じて藥用となるも或は期すべからず、然れども余は、若し事態之に頼らざるべからざる如くんば、最も慎重の態度を以て、少なくとも次の條件を満たさざるべからざるを主張するものなり。

第一、制裁の最後の手段として、時に依りては、鐵拳を用ひ得る事を、全團練一同規約をなし、以て豫め、法律に抵觸するの範圍を脱すべき事。(斯くして尙ほ法律に觸るれば鐵拳制裁の不可なる固より論なし)

第二、充分事實の真相を探捜し、苟も、遺漏、過失のあらざるべき事。

第三、先づ忠告狀を送りて、改心を求むる事。

第四、制裁を加ふる委員は、名義上、及事實上、全團體を代表し、公權公約に據りて行ふべき事。

以上余が、長々しく校風と制裁に關して論ずる所のものは、要するに、制裁は校風發揚の手段なること、制裁は公の手に依りて公明正大に行はるべきこと、特に、鐵拳制裁の如きは最も慎重なる態度を要すべきこと、等なり、固陋もとより盡す所、足らざらむも、暫く茲に筆を絶ち、他日機を見て再び、秃筆を呵するの日あるを期す。

聞く近來吾校に於て校風發揚の聲頓に高きを加ふと。余は北辰校の前途を想ひ内心の悦、禁ずる能はざるものあり。然れども、自然は一の眞理を太鼓に示し、鈴鐘に表はす、曰く、音の大なるには、其の内、空ならざるべからずと。乞ふ校風發揚の聲よ、一陣の風に化して、吾人をして失望の期待者たらしむる勿れ。

爲政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之

三軍可奪師也、匹夫不可奪志也

古人有言、蟻蛇一螫手、速斷腕、今日之計、非尋常補綴之所能濟、必也、英決果斷、如解腕之壯士、而後轉禍爲福、以患爲利、可以建大業矣、

(論語)

(論語)

(松陰)

雜 錄

感 想 錄

平 松 萍 水

一、眞理の存在

懷疑者ピラトは曰く「眞理は何處に存するか」と。

蓋し古來數十の哲人が其の心靈を苦しめ、腦漿を絞りしも一つに己れ先づ眞理の彼岸に到達せむ、眞理の靈泉に浴せむと云ふにありき而して羸ち得たるもの果して何物ぞバイロンが此れを罵りて奇なり奇なり眞理は小説よりも奇なりと絶叫したるに對し其の然らむを主張し得るの根柢を得たりや否や。

宇宙はげに混沌なり人生はげに矛盾なり衝突なり不可解なり、燦爛たる星宿は天にかゝりて我れ等に其の光を永劫に與ふ、我れ等之を望みて自己の微小を感ずるは恰も醫家喪家の瘦狗にして途上勇壯なる狗に遇はゞ匍匐膝行自ら其の威に壓せらるゝと等しく自然にして超反抗の力あればなり、吾人の微小なる兩眼もて見たる宇宙と眞宇宙とは其の差吾人がパノラマを窺ふて得たる感想と實象より受けたる感想との比のみならむや、吾人の兩眼に映じたるの宇宙は籠に捕はれし悲れなる鳥が罅中より外圍を觀じて得たる空間に對する感想に等しく如何んぞ不撓不屈の翼もて遙の

大空に飛躍して得たる空間に對する觀念に及ばむや、宇宙は混沌なり然れども雄渾なり勁健なり微小なる我れ等如何にしてか其の龍大を解し得べきさればゲーテは宇宙と人生とを靈妙なる大活動と觀じたり

此の靈妙なる大活動の中にありて燃ゆる心象を滿さむと醒醒し不朽を願ふ美しき思想は應て是れ人生なり、而して我れ等が心象は日にく移動變遷して止むなく遂には無限、常住、不動、獨立、全智、全能にして我れ等初め總ての物体を創造したる神を以て我れ等が心象を滿すべき唯一の對象となし神に縋りて人生を解せむとするに至れり、即ち神に接觸する此れ人生の一大目的にして又自ら其の所に眞理の源泉迸出すとなせり、宇宙の靈妙なる活動中にありて眞理の鑰を求めむとするは恰も漾々たる海中にありてゆるべなき一葦舟もて海底深き寶庫を探ると等しくそこに幾多の障害あるべし蹉跌あるべし、故に人生は矛盾なり不可解なりとの叫聲も生ずるなり、神に接せむ眞理の泉に浴さむと志すは既に向上の一步也、されば人生も亦向上を以て其の第一義とす、斯くの如き人生を眞面目に有價値に過さむため我れ等は果して一切の罪惡不等の前に立ちて洒々落落平然として其の目的を達し得べしや、これ極めて覺束なき問題にして我れ等か空虚なる内心は蛇舌の如き罪惡の捕ふるところなり其の左右するに任せて遂に煩悶疑惑無意義にして價値なき人生を送るに至らむ、かのエルテルが友ギルヘルムの「君はロットに望をかくるか抑も然らざるか、君にして第一の場合ならば飽迄彼の女を追求し君の願を果さむとを期せよ、翻つて若し第二の場合ならば滿身の勇を鼓し君のあらゆる力を蠶食せずむば止まざる憐むべき感情を擺脫せよ」と言

ひたりしとき感情にのみ充盈し一人のロットを見ざれば總ての物皆失せたと等しかく程淋しき心なし、彼れ等兩人の足と足とが机下ゆくりかに相接すれば彼れの血汐は一層の力を覺ゆる心狀にありエルテルは答へて「さばれそは余りに速斷に非ざるなきか、然らば病魔の爲めに日にく衰へ行く人に寧ろ一思に及に伏せと君はしも云ふか」と、又エルテルは彼れの情緒の激越に過ぐるを尤めて「御身の破滅とならむ程に心を留めて自ら愛護し給へ」と云ふロットに答へては「あはれ天使よ卿が爲めには生らへざるべからず」と

而して思へロットはエルテルの自由に任せらるべきものに非ずして既に人妻と定まりしものならずや其の己れの者として熱かき情を與へられざるは瞭然たる事ながら彼れは是を忍ぶ能はず萬籟寂として四隣物靜なる夜「最後に於て此の方此の勇氣を與へ賜ひし神に謝す」と言ひ終らぬ内に銃丸は彼れの咽喉を貫けり遂に彼れは自らの手を以て自らを犠牲となし終れり、何等悲惨の一齣なるぞや、かくエルテルをして沒常識、沒理性的の言を吐かしめ其の慘澹たる最後をなさしめしは空虚なる内心に付け入りし惡魔の仕業に非ずして何ぞや、人生の矛盾はか程迄も空虚無實の此れ等が内心のいと恐るべき物なるを示す色然として驚き戒めざる可らず、かく惡魔に魅入られし人生は神及び眞理を曲解するに至るべくエルテルをして神は無情にもロットを我れに抱かしめず我れは彼の女を有せずしては眞理も何ぞやと苦悶の聲を發せしめたる如かるべし、所詮我れ等は神及眞理の絶對の存在を認むる能はじ吾人は吾人の心情の如何によりて有情慈悲の神も無情殘忍苛酷なる神をも作り得べきと同じく吾人の心裡を基礎として初めて眞理の眞影を認め得らるべき

也かのエルテルが神を無情としたるに反しポーロがタマスク郊外一大靈光に感觸して「あー神よ」と云ひ愈々其の信念を強め全身を神に捧げたりしも皆其の當時の心裡の状態如何に據りしならずや。

吾人は死と云ふ問題に對し極めて敬虔の念と恐怖の思とを以てする如く生命と云ふ物に對しても極めて忠實也、眞面目也、眞摯なり、忠實なるが爲めに人生に起るあらゆる現象を解釋理解せむとこそ務むるなれ、爲めに矛盾も生ぜむ、撞着も來るべし、然れども矛盾撞着を來すがこれ聽て人生に大價値を生ぜしむる理由にして容易に大盤石の下に立ちても恐怖せざる安立の境に達し難き理由也

蓋し吾人が神を感じたりと云ひ眞理を解したりと云ふも等しく是れ吾人の心情を切磋琢磨したる結果己れの硬き信念の産出せるものに外ならず而して吾人の思惟に據れば眞理は眞、正、善の三方面を完全に具備する人に於てこそ初めて見出し得べきなり、眞なる事や、正なる事や、善なる事や皆之れ人生のあらゆる經驗上日常流れ易き繁實を去除して華々其の美を容るゝによりて得らるべし且つ眞、正、善の三方面を有したるものは即完璧なる人格を有したるの人にして聽て是れ偉人也、故に吾人は眞理を發見し認識せむとするには自ら偉人たらしむる可からず、眞理を他方面に向つて求めむとするは何等の逞遠漢ぞ、傳へきく米獨立の際、大頭領アダムスはヴェルノン山中に隱退せるワシントンに書して曰く「願はくば芳名をかし給へ君が芳名は數萬の兵力よりも効果ありと」あゝ偉ならずや、偉人の勢力中には自ら眞理を含有す、現世に不満を抱き、より偉大の境

遇に我れ等を導かむを欲したりしバイロンは現世に向つて慟哭なかる可からず悲哀なかる可からず彼れが憤懣の心は忽ち雄大の詩篇をなしたり若し彼れが詩にして完璧なる人格を謳歌し表現したらむにはそこに偉大の勢力あり、不可思議の感化あり、そこに初めて眞理を生じ得べし、故に人は先づ己れの人格に於て眞、正、善の三要素を包含するをつとめよ、然らばそこに眞理の迸出する源泉を生せむかな。

二、現今の文明

吾人の嗜好、性格は皆異れり、故に現今の文明に對する感想の状態も種々雜多なるべけれども吾人は今其の岐葉の論者に乗てゝそが大体を分類せば二方面となすを得べし、一は悲觀的、他は樂觀的なり前者は好んで現代を墮落せり降下せりとし曰はく彼の奢侈遊逸の様を見よ、道學者の腐敗を見よ、宗教の頹壞を見よかくて文明の意義いづれに存するやと只管社會の缺陷余弊のみを指摘して切齒専ら現代を呪咀し道義の念なければ世は撈和の巻と變せむと後者は是れに反し一理一害は數の免かれざるところ、現今の文明中に其實贅すべからざる可きものもあるならむもしかし憤慨し、嘆息するに及はずとなし如何に植物の幼芽を生じてより其の種子を結ぶの少なきかに比して總て事實は其の完全無缺を望むべきものならず如何に花咲くも種子を結ばざれば如何せむ廣袤なる文明の意義中にも悲觀論者の罵詈するに對して其れに優る種子となるべき嚴格なる分子存すべしと専ら其の光明の側面のみを觀し現代を贊美するものなり、蓋し此の二論者いづれも共に偏見的觀察をまぬかれざる也即ち前者が一時の感情に走りて其の光明の方面をも失忘したるに比し

後者が一圖に現代の文明を以て謳歌し蟻の如き小動物も能く家屋を破壊し得るを思惟せず其の一面の黒点が如何なる勢もて其の龐大の勢力を振ふべきかを豫想せざる如きこれ也

吾人は今此の兩論者のいづれを是いづれを非とも決せざる可し物各々其の弱点あると共に長所あるべければなり、されども現今我が國の文明が文明主義の標準より見て如何なる状態にあるかを暇々せむと欲す、超自然主義即偉人、天才、宗教家の挑出せる時代を以て文明時代となすべきと云ふ個人を基礎とし個人を對象として考究せしものとこれに反して總ての物即社會の文明になり行く時代を以て文明時代となすと云ふ團體本位説との二様の研究法に於て前者即超自然主義をとりて我が國文明状態を見むか我が國は全然非文明也未開なり何となれば未だ一つの孔夫子なく一つのソクラテスなく、一つの釋迦なく、沙翁なし然れども余は文明の標準は正しく後者即團體本位主義に依らざる可からざるものなりと云はむ若し社會にして不文明、未開ならば、如何に多くの沙翁出で如何に數多の基督出でむも耳を傾けてきかむとするものもなかるべく遂には支那が其の歴史と共に進まず常に回顧嬰退し行き彼れ等が夢むる新文明は遂に却て彼れ等が數百年昔日の状態に過ぎるが如けむ宜しく其の社會を構成する人類一般の知識の豊贍如何によりて此れを定むべき也印度「アールヤ」民族の人文の定度は彼れ等が知識を重する人種是れを渴望する人種なるが爲めに三大思想とも稱すべきものを生じたる程なりき知力は一アールヤ人種ならざる他の人種に於けるも心性の最大動機ならざる可らず此の点に於て我れは我が國の現今の文明は決して悲觀すべきものに非ずとなす、悲觀者が以て墮落降下せるとなす學界に於ても古往の學者と比し其の

數に於ても彼れ等が研究の量に於ても決して遜色なければなり寧ろ優ればなり。

妄 語

三 郎

最早秋風が金城の木々に冬を警告せんとして居る燈火したしむべく又感多き時である。一寸或る事を思ひ出たがそれからそれへと蟻の行列の如く妄想が出る。

人生は語學を學ぶに似て居る頗る似て居る。いくら華嚴の瀧や淺間山へ行くと何等のオーソリティーも見出し得ぬ然り吾人は一時間の前途を知り得ぬ危険にあるのだ。さて獨乙語の入門書を讀むだと假定して名詞と動詞とを暗記したとしよう僕の知つたのは總ての活用の一を知つたのみで先に Köpfe と覺へしは Kopf となり Kopf となり Binde は Band となり Bänder となり五里霧中で曰不可解となるが其の用方を知れば何でもない。青年には人生觀は不可能だ浮世の波に當てられて表面裏面甘いも酸いも知つてこそ始めて人生の何たるが少しは會得せらるゝであらう等思ふと世間で善とか悪とか云ふて居るのが皆小さき眼を以て見て居る様に思はれて是非僕が善惡の定義を下したい。

論ずるに先んじて人類の頭はあまり猿類と異ならないと云ふ事が實驗上證明せられると云ふて置さましよう。

この善とは如何の問題はオリブをやかましく囃し立てたギリシャでも中々昔から物議があつた
 そうで厄介物であるそうです。

秋だ感が多い僕は一層腦の働か度を増した様な感がある。善!!善とは吾人が本能的に善と感ず
 る事が善だと僕は断定した決して不思議でない、之を實例について説明をしよう。

エンゲレンやエソップの話の中で愛らしいレムヘンを狼が食ふたと云へば人は狼を大悪人と例へ
 たのであらう。然らば吾人が日々の食事にての罪惡は云ふに堪へぬ次第だ。狼は自己の食事を
 したので何の罪もない唯だ人間が罪惡と思ふのみだ。盜賊が を見るのと孝子が之を母に進めん
 とするのと同じ事で自己の感覺により善惡が定まるのみである。恰も秋の月が見る人々の心に一
 任して自己は唯同じ光線を發射して居る如くである。

と斯く論じ來たが自分には何か不足な所がある様に思はれた。そして亦今度は斯の如き事を胸裡
 に浮べた

人類の矛盾性、

人類には甚だしい撞着した事をやる者である但し以下の數言は決してそうでないと思ふ 何故か
 かる性を有するや。一体動物には生命がある其の爲め「命ありての物種」なる定理の下に生存競
 争をするは明な事柄である。こゝに於て動物は各自の争より類を以て集り蟲は蟲、人は人。或は
 日英同盟となりカイゼルがあわて出す等生存競争の結果同種屬の一致となる。この團體で競争す
 る方が一層便利なは道理である故に。一パーティーの強大を謀る爲め自己の利益の幾分を犠牲に供

するのである例へば公衆衛生。公德等と天井裏や床下までいや／＼ながら御掃除をする電車の中
 で飲みたい煙草も辛抱して居る露國と戰端を開いた。上村將軍は敵を破て又敵を助けた實に英雄
 だ。破る者なら助ける必用はない戦争と赤十字とを結んで文明だと云ふ面白いではないが吾人
 が盆裁に就てこの性をよく顯して居るのを見る

思ひ出したが前の善に就てまだ云ふ事がある

道理はわからないか悪いと思ふ事はしては悪いことは僕等の實驗して居る所であるが。こゝは小
 生の本能的善の活用の眼目だ或る日親の命に反いて或る處まで行きしに斯く／＼の凶事なん侍り
 ぬ等とは慥かにこの消息を書いたのだ。實は宗教もこゝから出た者であらう本能と云ふと高山
 先生を思ひ出す先生の文を読む毎に何か知らぬが其の文は病氣にかゝつて居る様な心地かして氣
 の毒だ

僕も身体虚弱で以後は必ず深呼吸をしようと思へると金澤第一中學校の生徒の胸を張て揚々頗る
 得たりの英風を想見する或る人は第一の校長が胸を張つて歩行せらる故だと云ふ然らば本校の生
 徒は至誠を第一として紳士たる体面を重すべしだ。

兼六公園に來て見れば案外馬鹿氣た物だ。僕は本年夏期休暇を利用して山陽道を探勝し宮島ま
 で參詣して歸つたが亦金澤へ來て其の夕方公園を散歩したが案外見劣りがせず返てよと思ふた、
 世の中は恐しいものだ一石一木皆古人の誠意配合したもの。ますますも箱庭的でも其の至誠の發
 現は慥かに人をして好ましめないでも飽かしめない事はHonesty is the best Policyなる言を味はし

めた。この飽かしめない事は公園をして高尚優雅百万石の庭園だと思はしめた要素である。

寒 燈 錄

あ、

ん、

○愛する所其處に神ありとは吐翁の揚言なり、實にや愛は人間唯一向上の道ならざるべからず。地上の正義か天上の慈悲によりて和けらるゝに順ひて人は更に神に近かんては千古變らざる沙翁か鐵案なるべし

○愛は必ずしも正義にあらず、往々にして愛は全く正義と反す而して吐翁と沙翁とはこの兩者の抵觸するに際し從容義を捨てゝ愛に附くか如し、如何なれば人はかくわらざるべからざるか

○一切の虚飾を去り、一切の装束を去りて赤裸々なる人、更に凡ての外物に誘はれたる迷心を悟りて、眞面目なる自己に歸へれる人は必ずや自己を欺き得へき者ならず、欺き得べからざる例へは明鏡の如き自己は、一切我等か思想行爲の唯一の標準ならざるべからず、良心とは完全なる自己の謂なり

○やくもすれば東洋の道德は摸型のみ仰々しくて其内容の適節に我か心底を動かすもの乏しきに似たり、所謂道學先生とは自己心靈の要求を省みず、一子相傳の學說のみを云爲する學者に捧けられたる敬語なるか如し、剽輕にして皮肉なる川柳師は口吟んで以て先生と云はる程の者の價

値を評し去らんとす

○然れどもこれたゞ一面なるのみ、極言すれば姑息なる政策の干渉よりして訓話註釋のみを思想家の事業と誤りし學徒の末流なるのみ、人心の源泉よりほとばしる清澄なる溪水は、巨巖を破り斷崖を蹴り、常にその自然の要求する本性に従はずんはあらず

○天然の要求とは必ずしも區々たる場合に應じて自己の利益を追ふべき者にあらず、寧ろ必然の勢なるのみ、北海に朝する河流の時には迂濶なる方法にもがくはらず南流せざるべからざるあり、南海に朝するもの又時に北流せざるべからざるあり、天地日月の運行は自然なり、而してたゞ自らに利なる道を直進する能はず、宇宙は常に曲線に運行す、一莖の花一塊の石彼等は常にこの自然に従つて美をなす、理はやゝ滑稽に落ちたりと雖も要は其の人たる者はたゞ利己の爲めに動くべきにあらず

○宜哉 數次の暴政に逆流して基督教は遂に羅馬の國教となり、戰國の風濤に逆流したる孔子の仁義は遂に平和の世の官學となりぬ、歴史は約言すれば人間自然の要求の水脈が蜿々迂回して歸依の大海に幾歩を進め得たるの徑路に外ならず

○自己か深遠なる要求はこれを人類發達の歴史に徴し、果た小兒成育の歷程に照さは、自己の確立に外ならず、古代の制度及び法典に比して近世の者は概して個人を尊長するの傾向を示し、一切物品の所有權の如きは遙かに後世に於て確立する点よりしても、人智の發達は否むべからざる勢として自己の考を發達せしむ、太古無智の人と幼童の思慮なきとは時に彼等か目前の利害に關

して、恰も野犬の骨を争ひ猫兒の肉塊を競ふ様に他を排して自己か欲望を遂げんと狂ふ点に於て智識發展する人の成し能はざる迄自己か要求を進行して愧ぢず、然れどもこは完全なる自覺の發現にあらず、淺薄なる狹隘なる自己か要求に屈して、更にその深底にひそむ自己の聲を知らず、利欲に迷つて狂氣の如く他と争ふ様の激烈なる事に於ては何となく自己確立の地盤固きか如くなるも、それは彼等か一切行動の盲目的なるよりして引き起す謬見なり、草昧の民と幼少なる孩兒とは必ず自己を知らず

○仁義五常の教の表面より人倫を教ふに對し我等は良心自裁の道德論によりて根本より人間行爲の必然的意義を開發せるの更に著しき功果の存するを身自らに感じぬ、「汝の良心に問へ」とはあらゆる現時の倫理書の滅亡する後迄も赫耀として人心の光明をなすや明かなり

○良心の意義は必ずしも千古一樣の解釋の下に羈束さるゝものにあらず、世運の變遷は人間思想を動かし、新らしき思想は新らしき解説を一切の上に與へすんはあらず

○良心は果して道德の所謂善の凝結して成立せるものか、果た宗教の所謂神の附與せる靈性か、其何たるを知らず、たゞ我等はその要求は極めて眞摯のものにして、自己を欺くを敢て成し得られざる人の必然服従せざるべからざる最高遠の絶叫たるを信す

○愛と正義と、其輕重を論するに當つてや我等の依憑し得べき唯一の權衡は自己良心の最高最遠なる絶叫其の物なり、吐翁のそれは愛をとり沙翁のそれも亦愛をとれり、正義の力はよく淨罪界に及ぶも、天堂の門戸はたゞピアトリッジの愛のみよりて開かるゝ者と觀したるダンテ亦その

人たらしまるべからず

人の歌皆墨をもて成る、

我が歌ひとり、血を以て成る、

血を以て成る我が歌の文字

一々起つて、大空に舞へ

(出處)

男子歌はず、蝶鳥の情、
野客尙知る君主の恩、

(出處)

うなぬ兒が、鮒釣る、里の溝川に、
櫻流るゝ春の夕暮！

山鷄の羽うちして、逃げて谷川の、
水にうなづく白百合の花！

(出處)

君命身に在り劍腰にあり、
風餐露宿、何かあらむや、

縦横馳突す千里万里、

樓閣を斬つて、笑みて還らむ、

(出處)

文苑

陸軍大尉大田君碑銘

村上函峯

余既記廣中中佐碑陰。今銘大尉大田君墓。豈無愴然於懷乎。君諱貞夫。世爲加賀藩士。父名信道。母奥山氏。明治二十八年。入中央幼年學校。三十一年。爲士官候補生。屬第七聯隊。三十三年。任少尉。爲聯隊旗手。尋進中尉。叙從七位。三十七年二月。征俄役起。補第三大隊副官。大隊長。即廣中中佐也。七月我軍向旅順。君戰于安子嶺徐家屯。皆有功。八月二十一日。虜食潛發。攻盤龍山。敵據要害。銃礮交發。我軍諸隊不得相援。君謂大隊長曰。勝敗之機在此。率所部。踴躍突擊。銃丸貫頭而斃。時年二十六。進大尉。叙功五級。授金鷄勳章。叙勳六等。授單光旭日章。君幼穎悟。好讀書。頭角嶄然。眉目清秀。接人和易。而有確乎不可拔之節。廣中大隊長深愛之。故悼君死。殊甚。繼亦斃。十一月十四日。葬遺骸于城南立像寺。蓋從先隴也。君之高祖父錦城先生。學問淵博。尤長經術。世爲儒宗。君則以武揚家聲。一死報國。先生當含笑於地下矣。頃者。信道君來請銘。余素慕先生學者。義不可辭。乃次第其言。并及之。銘曰。

奕奕神采。與櫻花散。王事靡盬。一死報本。

名門不虛。果出烈士。文武雖異。家聲復起。
 金城之南。爰築夜臺。蒸維骨厚。魂兮歸來。

盾守る少女

(テニソン卿作エレンの一節)

靜池庵

美はしエレン！ 愛らしエレン！
 アストラアトの 白百合の花！
 花の少女子 高塔の上
 ランスロットの 盾をぞ守る！

豊榮登る 旭日の光線
 逸早く 盾を射よとや、
 盾の面輝る 旭日の反映に
 朝目よく 目さまざんごや、
 東に向けて 巳が居室にぞ
 尊き盾を 昨夜より置さし

盾の面に 鏽もや來ると、
 盾の面に 垢もや附くと、
 絹布の帛もて 囊造りつ、
 囊の上に 金糸銀絲に
 盾の面の 裝飾繡ひ取り、
 優し少女の 思考凝らして
 縁に繡ひけり 小枝木の花、
 小鳥の雛の 巢籠る態をも。
 斯ても少女 心ゆかずや、

静心なく 朝な夕なに
己が務も 厳し父も

後に身一人 塔に駆け往き、
居室に飛び込み 扉鎖しつ、

囊の盾の 囊抜き去り

盾の面を 只見守りつ、

盾の面を 只見守りつ、

盾に潜める 意味もやあると。

頓て少女は 眉の上なる

打物の疵 疵の數毎

微妙し歴史を 心に編みぬ。――

此の太刀痕は 最も鮮明、

此は十年をも 早や経たらんぞ、

此の槍疵は カエルリレにて、

此はカエルレオン 此はカメロットにて、

わな傷はしや 此處の深疵！

此の突激や 他人を殺せし？！

あら難有や 神の御恵み！

發止！此の盾 投槍止めつ！

敵は反動に 頭天轉がる！

嬉し！彼人には 微恙なかりき！！

少女はかゝる 空想に活きぬ。

抑もやエレンは 何時如何にして

ランスロットの 善き盾得しぞ？

ランスロットと 其の名をだにも

露聞かざりし 其の猛者の盾？

アーサー王の 聞き給ひし

金剛石の 競技の場に

(金剛石を 賭けしものから

金剛石の 競技と呼びし)

頓て迭に 殺してき。

斯くて幾星霜 経たりけん、

髑髏は曝れて 苔生して

小石と分かす 轉がれば

鏝はいよく 物凄し。

其の國王の 戴きし

金剛石の 王冠や！

正面に一個 右左

四個宛寶石 鑲めし。

かくどは知らず アーサー王

朧月夜に 只一人

道なき道に 迷ひ來て

王の骸骨に 躓きぬ。

金剛石を 得まく欲して

ランスロットが 出演し其の時

エレンに托せし 盾とこそ聞け。

アーサー王の 即位以前よ、

クオネッセル 漫遊の途次、

人跡絶えし 深山路の奥

最と物凄き 谿に迷ひぬ。

眞黒き湖水 灰色の斷岸、

斷岸の邊傍 陰霧さ迷ひ

湖水の周圍 鬼氣人に逼る。

傳へ聞く 兄弟二人

(其の名は誰と 傳はらね

一人は國王 なりけらし)

此處に挑みつ 戦ひつ、

骸骨は碎け 王冠は
月に輝き 赫燿と
流れて湖に 入りにけり、
いさゝ小川の、風情して！

嶮しき巖に 傳はりつ
王冠を得つ 戴けば
胸に聲あり かくとこそ
「見よ汝も亦 王たらん！」

花づくし

江南白雪

絲瓜

板あたらしき裏の塀、
雨に白みて日に燃わて、
けさ照りかへすががやきの、
額にせまる火に似たり。

淺黄、紺青、深緑、
ひろ葉に翻へす袖裳裾、
板にうつれる影さへも、
風にゆらゆらわたるかな。

塚をつたひて、絲瓜の、
黄金の花びら 黄金のしべ、
かざし亂せる宮のひと、
つれて舞ひゆく宮のひと。

歌の驕樂に眼は燃わて
遠世を戀ふる我なれば、
夜ごとの夢の供奉まねて
眞晝にささぬいどうりの花。

月見草

黄金の小さき 簪を
左右にはさめる歌姫の
ゆれて立ちそふ風と見て、
身もほそやかなの月見ぐさ。

花びら吹けるひとすぢの
かせに愛だれ、かすかにも
夜のつつみしためいきを
わななくいきの音にこめて、

よればゆらぎぬ、たたずめば
青葉の袖はひるがへり、
藁の粉ちるや、はらはらと
かされる霧は頬をすぎぬ、

向日葵

露にほふ眞夏の朝の
光より今うまれしや
ひともの黄金ひぐるま
輝やかに花ぞくゆれる。

蕊の香に心たゆたひ、
たもほてる風のながれの
うらはゆき爛の息は
くちづけの甘さを覺ゆ。

菊
高き枝の廣葉の搖れに
隈もなく庭の明れば、
天冠の榮華にも似て
空に照る、黄金向日葵。

秋吹く風にしろがねの
燗かざして生れたる
舞樂の童菊のむれ。

いたましや、眞玉の額を
時雨ふる土にまかせぬ。

七たり連れて庭めぐり
わが窓めぐり、はなやぎて
高く捧ぐる大はなは、
天の宮なるたいまつや。

色あせて狂へる花は
うつくしきのろはれびとや
ふく風は情こはくも
執ねくもやまじとぞ見る。

月になびきて夜のそらに
ほのじろふこそ舞へるなれ、
息はかをりに熱りつゝ、
ゆるやかにしも立ちそひぬ。

ひなげし
天つ日のががよへる
姿見て、ひなげしはまばゆげに
さと面あかめうなだれぬ。

菊

秋風の吹きのままに
とりみだし伏すしらぎくは、

花床の香の霧は
末廣に立ちこめて、振袖の
みどり葉もるるあてはかさ。

夏の風はなびらに
そよ吹けば、火のごとき唇は
ものいひたげにうちふるへ、

色に香にことごとく
聲いでて、虚空には日の花も
瞳をひらき笑みたはず。

伶人

渡邊庸三

月三更とふけ渡る天霄星の花遠く
地は幽笑の香にくゆる万象眠る常闇の
そぞや幽林の滅の音白鳥眠りまどかなる
月影うかぶ靈沼の漣波しづかに影のせて
秋夜音なく夢に酔ふ

星辰花の衣の音か林間暗をふるはせて
迷路にまよふ夢の如幽かに響く低唱の
曲はいよ／＼朗らかに雲の戸いづる月の如
蹺音かすかに響くなりあら莊嚴の沈黙や

現はれ出でぬ伶人は微笑み立てり伶人は

「色あせ花は移ろひし嗚呼旅衣戀宮を

いき幽林に来てみれば天には光孤月輪

天地讚美の歌に酔ふ」宿るは天の靈の聲

眼は花と輝きていま幽沼の片ほとり

伶人白き手をあげて

「天宮の香爐歌のせて勾欄薫すや月宮殿

翠帳ふかき天上の麗姬幽麗の乳の香や

血潮に燃わよ火となれ」と紅熱朱唇は火の如く

眼は星と輝きて天地俯仰の物思ひ

月は玲瓏となりきしむ天欄すべる甘泉の

あら燦然とふり下る響くは崇し戀の花

伶人笛も破れよといま靈沼にとび入りて

「天地幽冥の鳴應や万象花と輝きて

その一ひらの我は今深夜幽林にさまよひて

流轉靈動の琴の音に崇き天籟の聲をさく

我が戀!! 靈よわく我!!」と

伶人白き手ふるへて白鳥夢は破れたり

ゆく大洋の音の如月は朗々と鳴りとよむ

天地反響の雄叫びや万有無象歌に入る

あるは軀車のさしむ如あるは天華のさくやきの

例へば星の閃めきのあるは海神の笛の音か

伶人笛をとりあげて伶人笛も破れよや

白鳥夢神と現じたり雲霓綾と亂れつゝ

あもりぬ秋の夜の夢。……………

白菊清き香にうづむ古沼月夜の波の聲

憧れ入りし伶人の波はうなじにさゝめけり

行きしやいづく底ふかく微かに響く笛の聲。

「こゝ靈沼の菊の香に秘めしや万象幻を

その歌のせてうたかたの聴けや神韻の流るゝを」

崇き神世の戀の花

天地万象の幻の

みよ此一ひらに流るるを

さけや靈唱の流るるを

「奇しやうせにし花妻の花の調に似たるかな
若き思のうつろひていつく隠るるあゝ妻よ

泣いて歌をば歌ふかな戀しなつかし嗚呼つまよ」

白香さつと五月雨れて微笑み立てり花妻は

「星は地が妻、地がつま星よ

花はうましご、うまし子草木

天はなが妻、ながつま地よ

「樂め友よ、天地は歌」と

天の反響地の叫びとざろくと鳴りとよみ

深淵靈霧と散じつと……………

現はれ出でぬ伶人は幽波さゆらぐ唯なかに
明月さして微笑みて俯仰幽林の秋の夜。

秋興

つちよ地よ深き啓示の秘め琴の

音に酔へとや嚴そかに奏つや秋の夕暮を

我唯ひとり微笑みていさよひ響く足の音は

これぞ万有の靈の手の互み通はす歌なりや

明月青し影一つ天地静かに夢に入る

人は移らふ花の香を人は流るる星の香を

我も今聴く地につちに秋雨寂窓の訪れを、

そこに宇宙のさくやきのそこに自然の閃めきの

あゝ地よつちよ永劫に溢れきらめく靈の琴

遣憤 一章

(詞兄水衣君に寄す)

白山の麓をすぎて

大艦の波にかまれて

秋

水

漂渺の沙路渡ると

土に眠て蟻に刺されつ

夢深き虫のありけり

荒靈は嵐に飛ひて

大光は千さに祭えて

和靈は雪に凍るや

紫の風はそらうに

かくてこそ小田に弓とる

枝高う光にくらむ

群雀の笑ふ鳥あり

風吹かは風のまに

雨ふらは雨のまに

神前に眼怒らし

這ふ虫も心持つ世に

髪たてと瓜を磨きつゝ

さりどては人のあやかな

たげるかの獅子の姿や

頭をば孺子の汚せる

冬枯のさびれを厭ひ

白山の嵐渡れば

睡れりや薔薇の薫に

玉敷くや大野のあした

言ひたりや蛇の舌して

花舞ふや暗檐の空

もね上る文化の炎

胸奥の厨子をも焼けば

迷境の夢を奪へど

後朝の鐘はひびけど

妄執を誇り顔なる

耳はなほ春の宵哉

現世の塵を離れし

月姫も時雨襲は

しかすかに肩をひそめて

死の國の光を投くれ

大空の星も讀むべき

堪然のみ池の底や

鯉飛へは水面はどよめ

悟とはかくてあるべき

和胸に歌を懷さて

迷ひ來ぬ聖者の里に

沙原も風の渡るを

月もなく水も沾れたり

文苑

文苑

文苑

文苑

文苑

荒靈は嵐に飛ひて

和靈は雪に凍るや

かくてこそ小田に弓とる

案山子にも人の似る國

風吹かは風のまに

雨ふらは雨のまに

這ふ虫も心持つ世に

さりどては人のあやかな

冬枯のさびれを厭ひ

白山の嵐渡れば

玉敷くや大野のあした

花舞ふや暗檐の空

迷境の夢を奪へど

後朝の鐘はひびけど

迷境の夢を奪へど

後朝の鐘はひびけど

後朝の鐘はひびけど

人道は舌のつとめよ

さけしみは瞳のつかさ

まかつみの絶えず寄するを

寢まごろみは心の責か

うつし世よさもあらばあれ

煩惱の波は高鳴る

離れ鳥歌の島々

美の靈か月はさやかに。

北海のほとりをすぎて

蒼溟の底や百尋

纏われて藻草花咲く

瀨三宮と游さ回られる

うろくづはどよみに震へ

文苑

文苑

文苑

文苑

文苑

文苑

文苑

小さは罪にも似たり
猛なるは神のふりして
審判か海のよめき
亡者たちみことまゝに

わてやかの匂もしらす
さてこそは憐れなりけり

やさしきは心の傷か
雄々しきは道に合へるか

青蠅は玉のかやくやく
玉冠をけがして飛ぶも
罪を問ふ人もなければ
方どて虫は誇れる

よそ人は死せる如くに
振舞ふは暴者の徳か

愛らしき誇ながらに

群盲が花見の宴

あまりとはこちたかりけり

篝火は晝の如くに

國しろすみかごの笏も

椀に盛る花びら噛みて

ゆくりなく虫をはらへり

「花は尙菜の葉に劣る」

至靈なる歌のみ筆に

たける等か頭をうちぬ

なき目にも花見る心

崇巖の歌のみ筆は

さすかにもやさしかりけり

しかすかに塵にそみたり

海神か歌の心ゆ

そゝかんか筆の汚を

花咲くやうしを八重潮

かくてこそ歌は薫らん。

短歌

野菊

其

月

よく見ればくはしいつくし野の菊よげにソロモンの富も物かは
野分して庭の草花しごろもどろ梢の柿に夕日残れる
悵として秋の夕雲ながむるを繪師わが友の暖かしのふ
夕づけはいよく榮ゆく秋山や母待つらむを門に倚り居て

村木大人に

父とだに云はぬ子なり其の子すら置きて來ぬれば夢にさへ見つ
東都なる水衣君に

雲間もる北斗の影をふる里と都の空にかへてをか見る

新年松

初日影さすや千代田の松のうれ嬉しと田鶴も群れて輪に舞ふ

みぞれ集

和歌會

(水鳥、氷、木枯、雜)

居代りて上羽の霜を拂へばぞ鳴の浮寝の憂なきを哀れ
 アラスカや巖乗せたる氷山の又も流れ來夕日薄れて
 木枯は杉の根を抜き枝を折り五重の塔に夕月淡し
 土を捲き梢を拂ふ冬の風の餘勢か千里海のごよめき
 櫛紅葉野邊は夕日の片明り獸に似たる雲ゆききして
 浦風は水の花の香を亂し流人か靈を奪ふ水鳥
 生きながら氷のどぢしうろくづか歌さへ枯れぬあだし冬國
 山越わて大野を越わて錦葉を夢のかたみこにじる木枯
 神無月紅葉あせたる幽山の聖者が墓は村時雨して
 み山路は紅葉ししぬと谷川の喜びて來る里の秋哉
 船の火はいまはの際と戰きて闇の底より水鳥の鳴く
 あたし世や歌はみながら胸底の氷につめて友を待つかな
 黒雲の科戸の神は大刀ふりて下界を低う寄せんとすなる

其月

あ、み、

空 白

大内のたぼねをさけて里隠くる女房が名か花の野菊は
 秋晴や黄金波うつ野の海の島する牧場にとぶよ天馬の
 枯蘆はわななくともうつろはぬ水に影見て契る水鳥
 なまじひに葡萄か泡の生命より氷をかみて夢や呪はん
 飢に泣くうまご残して薪木拾ふ婆子か髪にも荒るゝ木枯
 白瀧に紅葉を染めて秋姫は襟とやせまし月の訪ふ夜は
 夢あとは忍ぶの人を泣かしむと夢あとかくす蘿紅葉哉
 さびしさや水行く鴛鴦が劍の羽の滴にやせる冬の月哉
 薄情や身をはりつむる八寒の亡者に肖たる戦もすれ
 なべて世のなきから埋めて木枯が挽歌なかばに時雨する哉
 秋姫の晝夢に入る照妙のあやにも似たり野菊雛菊
 怨靈かいかもつ栗も怒りつけ稚子か手籠に眠る秋哉
 更けぬれば友の情もあたなれや霜に驚く水鳥の聲
 板庇水雨亂して大空は榮を奪へとたける越路や
 人去れば木枯窓につらうしてそごろや残る涙に泣きぬ
 よし雲は谷にひそむも大空にうつれと澄みし秋の白山
 谷川は紅葉一葉を大勢にみ興とつりて鈴なる日哉

山の人

を、し、

蘆 葉

かりそめの船夢呪ふ水鳥を悪しと云はず迷ふ心に
 冬姫はみ空をうして水に入りさやかに築く氷の宮か
 うらぶれは呪ひの吐息嵐して光をつむむ雲呼はん哉
 夕雲は明石の浦に裳ひきて錦に座はる淡路島哉
 枯山をうつすみ池の水鳥は死の國救ふ天使にも似て
 月姫のさゝかに訪へば水晶の宮居に似たり氷る池の面
 幽谷は血汐に飢ゑて荒れ虎の毛を逆立てて吹くや木枯
 死のきはにふと戀ひをむる若人とさびれの秋をもゆる紅葉
 夕雲をやとす水面は戀ふ人の胸の如くに闇の迫れる

あ、あ、
秋 水

俳句

十番句合

判者 紫影先生

一番 寒さ
 左 乳あへずなりし乳母の寒さかな 秋雨
 右 孫死して抱く子もなき寒さかな 白水

二番 春待

左 家は子に譲りて春のまたれぬる 秋雨
 右 愚にかへる炬燵に飽て春を待つ 紅葉蓉
 樂隱居の境遇こそ芽出度けれ
 三番 埋火

乳母と老婆 いづれか哀深からん 右は中七字手つゝ
 なり、左は詞優ながら言ひたらず、持

左 埋火や歌の論議に夜は更けぬ 秋雨
 右 埋火の跡かたもなく消にけり 白水

四番 毛布

左 きつゝなれし馬商人が毛布かな 秋雨
 右 達磨忌の毛布着て出る 座興哉 紅葉蓉

左 木兎に日やさす批把の花かげに 紅葉蓉
 右 木兎の遠くへ飛ばぬ 日中かな 白水

八番 煤拂

左 煤拂や寒梅移す雪の上 紅葉蓉
 右 煤拂の猫まで煤に汚れけり 白水

五番 殘菊

左 たのめてし人來す菊は皆枯れぬ 秋雨
 右 枯菊をしばり上げたりちぎれ繩 白水

九番 納豆

左 納豆汁交り水のごときかな 秋雨
 右 欠鍋の年頃ひさし納豆汁 白水

六番 足袋

左 白足袋にもえ立つ紅の花緒かな 秋雨
 右 赤足袋のピン／＼はねる脊中哉 紅葉蓉

十番 櫛

左 櫛焼いて酒養る宵や霰降る 紅葉蓉
 右 差向小顔見わかくる櫛明り 白水

文苑

(終り)

黃菊白菊

秋雨や 蝸牛ひそむ古簾
 羊追ふ 聲しきりなり秋の雲
 野良犬の 來て泣く軒や秋の雨
 ろの音の とぎれくや散る柳
 夜寒の きもにしむなり前わた
 鐘遠く 既に時雨し小村かな
 籠り居て 冬をわびしき吾家哉
 誰ぞ聞かん 切子の影の獨りごと
 釣り糸の ながるゝ方や散る柳
 浮雲の 流れつくして夕紅葉
 庵さびし 熟せし柿の落つる音
 朝寒に 豆腐買ひ行く在所哉
 柴賣のぬれて 行くなり霧の中
 尸なくや月は門田に落ちんとす
 淵明の 籬に白菊黃菊かな

梅雅

思ひありや遊子の涙月残る
 森に近く多賀の鳥居の時雨けり
 散る柳水いくすじに流れさり
 らくだ行くナイル河畔の月夜哉
 川にひびくまい子の鐘や秋の暮
 謠曲通小町
 深草や露の中行く小提灯

七翁

秋雨樓小集

磯村に 葉雞頭赤し鱗雲
 溝にすつる 鱗の腸や蓼の花
 草の實の こぼれくして蝗とぶ
 小山田や 鹿鳴さそめて水落す
 たちて行く 水の行衛や秋もゆく
 宇都の山岡邊の 眞葛末枯れぬ

湖月
 同上
 同上
 同上
 同上

落し水 閨を流れて音もなし
 家毎に 鯛干しある漁村かな
 末枯る野や 運動會の旗見ゆる
 蝨暫々 夜道の吾を驚かす
 鯛引くや 佐渡が島根に雲もなし

秋雨五句即吟互選

いつも 來る長座の客や秋の雨
 秋雨の 轉た旅情をさみしうす
 温泉の 宿の灯す早し秋の雨
 荷めの 風邪に寝る日や秋の雨
 秋雨や ゲソリと減りし藁の灰
 檜の實の ほどく落ちて秋の雨
 秋雨や 簷に乾かぬ干煙艸
 湖の 彼方は晴れて秋の雨

蝶羽
 紅芙蓉
 同上
 同上
 同上

鋸の 目をたつ人や秋の雨
 欄に倚る 夕の人や時雨雲
 下宿を引越して
 散り續く 落葉と共に宿かへぬ
 移り住みて 物皆馴れず暮の秋
 朝寒の 綱いや長し車井戸
 齒にしみる 酢あへ冷し暮の秋
 行く秋や ひとりの入りたる鐘がなる
 木魚うてば 堂閑として暮の秋

○那谷へ旅して

秋雨
 同上
 紅芙蓉
 同上
 同上
 同上
 白上
 同上
 同上

那谷寺や 紅葉ちり込む幕の中
 散るや紅葉 苔生す岩の觀世音
 巖窟に 灯明寒し薬師像
 投錢の 音淋しさよ秋の暮
 那谷は何とやら青き寶石出づ

雜吟

白水

青石の 飽くまで青く暮るゝ秋
 玉を賣る 店にちり込む紅葉かな

食ひ棄ての 握飲淋しうちる紅葉
行く秋や 背中合はせの石佛

四高俳句會即吟互選

冬の夜や鼠のさわぐ持佛堂 紅葉
いつも泣く隣の稚子や夜半の冬 同上
冬の夜や 貉を狩らん謀 同上
一日一信 布團の中に書く夜哉 同上
病む母に 布團更わけり小六月 同上
水鳥のかたまつてゐる霰かな 同上
水鳥の水を離るゝ腹白し 同上
水鳥や 兩岸の木立まばらにて 墨村
小走りの 下駄音遠き寒夜かな 同上
閑谷 鬢析うつ聲も寒夜かな 秋雨
風呂貰ひ 來すて早寐る寒夜哉 同上
水鳥や 曉越への山の池 同上
赤城山 同上

大沼小沼 こゝに水鳥宿るらん 秋雨
くるまつて 一茶がホ句や薄布團 同上
老ぬれば 病みぬれば重き布團哉 同上
革る父が 病や夜半の冬 同上
何をがな ものゝ食ひたき 寒夜哉 白水
水鳥や 歌上手なる配所人 同上
船の前夜 水鳥の出没自在かな 同上
茶の花や 竿に干したる夜のもの 同上
着 布團を鼠の走る寒夜かな 同上
長持の 布團出す夜の寒さかな 同上
新らしき ランプ明るき寒夜かな 同上
絹夜具や 古き 輝を耻ぢかくす 紫影
紙衾 叩けばそこらふはつきぬ 同上
子を抱いて 究屈に寐る布團哉 同上
水鳥や 枯蓮の莖ノ〜と 同上
水鳥の 立つや珠ちる月の湖 同上
思ひ出した 様に水鳥立ちにけり 同上
水鳥や つうと流してふいと立つ 同上

北辰時評

北辰時評

北辰時評欄生れ出でたり、此れ校風問題の
反應也、會員活躍の反響也、本欄生れて未
だ一日ならずと雖も既に斗大の膽と海大の
宏量とを有す、清濁の百川毫も拒む所にあ
らず。北辰校に於ける時評は悉く収めて以
て。我自由欄に於ける美花たらしめむとす。
本欄の降誕を祝して委員之を記す。

河合良成君に與ふる書

藤井 悌

河合良成君足下。僕頃來頻りに人の足下の名を
口にするを聞く、曰く、當今の學生滔々相率ゐ
て墮落の淵に沈み、痴態百出殆んど眼を蓋ふに
違あらず、獨り此間に河合良成君あり、所謂正

法斬馬の劍を提げて百鬼の跳梁を睥睨す、英姿
颯爽仰ぐに足るものありと。僕竊かに思へらく、
我北辰校猶此の健男兒あり、聊か以て意を強う
するに足ると、而して足下に囑望するところ尠
少に非ざりし也。然るに前號の本誌に於ける足
下の言説(かり、生の名を以てせられたる)を見
るに及びて僕實に長太息を禁ずる能はざりき。
廬山の真相素より一面を見て論ず可からずと雖
も、これを足下が近來の行動に照らせば畧々其
面目を窺ふに足るあり、僕深く足下の盛名の爲
に之を惜む、乞ふ卑見を述べて敢て足下の反省
を促さん乎。

事は主として新入生歡迎會席上に於ける森岡
次郎氏の放言に對して加能同志會が取りたる態
度に關せり。故に叙述の順序として先づ事實の
真相を見ざる可からず、森岡氏の言論は足下も
亦認むるが如く金澤市及び金澤市民を極端に罵

倒したるものなりき、ここに於て加能同志會員の多數は論じて曰く、苟も吾等金澤市民若しくは金澤市に深縁ある者の面前に於て此の如き非禮の言を爲す、これ取りも直さず吾等を無視したる者也、これを以て單に一場の失言なりとせば猶恕すべきも若し故意に爲したる者とせば到底看過すべきに非ずと、乃ち二人の代表委員を出して同氏の眞意如何を質したりき。同氏は答へて曰く、予は諸君に對して何等の敵意を有する者に非ず、たゞ予の不辨なる圖らず斯かる失言を爲したるは深く自ら責むるところ、乞ふ予が意のある所を會員一同に傳へて以て予が爲に誤解を解けと、別に其旨を書したる辨明狀を委員に與へたりき。斯くて此事件は終りたる也、少くとも終るべき筈なりし也、思はざりき今に及びて足下の叱責を買はんとは。

足下が第一の非難は加能同志會は團躰の力を以て一箇の森岡氏を威壓したりとの点にあり。足下の事理を解せざる亦甚だしい哉。夫れ箇人に於てまた然らざらんや。苟も十万の人口を有する復雜極まりなき一都市を論ずるに、足下及

て一箇の森岡氏を威壓したりとの点にあり。足下の事理を解せざる亦甚だしい哉。夫れ箇人に於てまた然らざらんや。苟も十万の人口を有する復雜極まりなき一都市を論ずるに、足下及

全躰に關す、其代表委員を送るに於て何の滑稽ぞ何の兒戲ぞ、はた又何の耻辱ぞ。況んや加能同志會は決して森岡氏を威壓したるに非ずして單に其眞意を問ひたる者、又同氏が與へたるは訛狀に非ずして辨明狀なりしに於てをや。社會は時として不徳なる箇人を壓服するに社會の權威を以てす、人は之を當然の制裁として怪まず、更に近き例を擧ぐれば、近來の一問題たる校風發揚の云爲の如きも亦實に箇人に迫るに團躰の威壓を以てするもの也、足下の明敏なる頭腦を以てして猶彼れと此れと同一の理に基けるを見ざる乎。

夫れ卒然人に向つて汝は愚者なりと罵らば其人まことに愚者なりとも必らず怒らん、況んや愚者に非ざるをや、既に箇人に於て然り、團躰に於てまた然らざらんや。苟も十万の人口を有する復雜極まりなき一都市を論ずるに、足下及

び彼は果して適當の資格を有せりとせずや。僅々二年の短日月を以て、智識淺く經驗薄き青年の頭腦を以て、學業に殆んど寸暇なき身を以て、數軒の下宿屋に於ける針の穴から天のぞくの的の觀察を以て、此地に於ける二三の新知人との朝夕の挨拶を以て、而して大早計にも金澤市及び金澤人を解し盡したりとなし、金澤市は淫靡の地なり、金澤人は小人なりと放言して顧みず、其大膽無鉄砲も亦驚くべきに非ずや、加ふるに足下また「實に吾人の意を得たる者なり」と雙手をあげて賛同し、更に「金澤の城下は伏魔殿也、腐蝕の地也、痾瘻病的の地也」と有らゆる惡形容詞を羅列して憚らざりき、然らば足下またかの盲蛇の列乎、ここに至つて僕實に啞然として言ふところを知らざる也。

第二に足下は加能同志會を以て言論の自由を束縛する者となせり。ここに於てか再び前言を

繰り返さざるを得ず、曰く、足下の事理を解せて放縱也、專恣也、足下乞ふ徒らに自由の美名ざる亦甚だしい哉。試に思へ、森岡氏の言論は適當なる準備と周密なる觀察とを缺きたる無責任極まる言論なり、彼は金澤市と他の數箇の都市とを比較したりや、統計を参照せしや、健全なる中流社會と交り見しや。若し暗黒面のみを見れば全世界何れの地か暗黒ならざらん、社會に暗黒面あるは猶家に塵溜あるが如し、各戸悉く塵溜を有す、然るに今特に一戸を指さして此家塵溜を有す否此家即塵溜也といふ、誰れか此の如きを責任ある言論なりとせんや。而して無責任なる言論に對して適當の處置を加ふるは、言論の自由を束縛する者に非ずして却て其健全なる發達を促す者也。吾人の自由は野獸の如き自由なる可からず、蠻人の如き自由なる可からず、此くの如きは却て眞の自由を呪ふ者、不正の自由也、虚偽の自由也、否、自由に非ずし

て放縱也、專恣也、足下乞ふ徒らに自由の美名に迷ひて其眞意義を没却する勿れ。既に言論の自由を束縛せず、即ち言論に毫末も累を及ぼさざるは自ら明なり。然るに足下ただに言論部箝制の罪を誣ふるを以て足れりとせず、特に「雜誌部に何等の箝制を與へざりしか」の言あるに至っては、僕遂に其の何の意たるを解する能はず。抑も今回の事件と雜誌部と何等の關係ありや、強ひて之を同部に結び付けたるは足下自身の細工に非ずや。人を責むるの前先づ自ら顧みよ、前來縷述せるが如く加能同志會の行動は尤も至極の行動也、然るに足下殊更に此の如き沒常識の言を弄して以て加能同志會員を挑撥せんとす、のみならず此欄に於ける足下は一箇人としての足下に非ずして北辰會雜誌部委員としての足下也、然らば足下は故意に雜誌部のために敵を求めんとする者、雜誌部を賊す

る者は加能同志會に非ずして河合良成君足下自身也。

且や一箇人一團躰に關する小問題を提げ來りて、強ひて掲ぐるに「言論の自由」なる大看板を以てし、敵意なき者を驅つて強ひて言論部の敵たらしめんと計る、其滑稽其兒戲は笑つて濟ますべさも、其惡意に至っては斷じて恕す可からず、然り、言論部を毒する者は加能同志會に非ずして河合良成君足下自身也。

第三に足下は一日會云々を以て加能同志會が學校全部を侮辱したる者なりと誣ひたり。言ここに及びてはもはや事理を解せざるの段に非ずして、足下は實に加能同志會に對して忍ぶ可からざる讒誣中傷を逞うしたる也。抑も今回の事たる學校其物とは何等の關係なき全く獨立の問題也、金澤市を侮辱したるは學校に非ずして一箇人たる、森岡氏也、而して之を質したるは學

校を質したるに非ずして森岡氏一箇人を質したる也、仮令森岡氏の言論は學校敷地内にて爲されたりとも、苟も二百の新來の客をして金澤市に對する惡感引いては金澤の學生に對する惡感を抱かしめたる者、事小なりと雖も彼等に取りては多少の損害なしとせず、故に彼等學生の團躰たる一日會が之を傳へ聞きて激昂したりとすらも必らずしも理なしとせじ、且これ學校を怒るに非ずして單に森岡氏一箇人を責むる者、これを以て學校全部を侮辱したりと爲すが如きは中傷に非ずして何ぞ、讒誣に非ずして何ぞ。のみならず事實は甚だ之に異れり、始め委員が森岡氏の寓を訪ひたる際、熱心なる某氏は特に之と同道したりき、而して彼が加能同志會員なると同時に一日會員なりし事と、數日前の一日會の會合に於ても森岡氏の言論を傳へ聞きて多少激昂せる二三の會員ありし事とは、彼をして此

二つの會を混同せしめ、知らず識らず一日會の代表者なるかの如き態度に出でしめたり。これ某氏一人の失策にして、爲に彼は忽違一日會に向つて謝する所ありき、如何となれば彼の失策は毫も他より責めらるべき者に非ずして、獨り一日會に對してのみ責を負ふべき者なれば也。足下既に雜誌部及び言論部の爲に敵を作りて足れりとせず、更に學校全躰に對して敵を作らんと企つ、何等の不埒ぞ、何等の不心得ぞ、而して足下今に於て猶自ら覺らざる乎。重ねて問はん、學校の平和を擾さんとする者は果して加能同志會なる乎、恐らくは河合良成君足下自身には非ざる乎。

以上述ぶる所を以て偏狹なる地方的敵愾心に出る者となす勿れ、金澤市の爲に辯せんと欲せば他に猶多くの言ふべき事あり、今特に足下の名を掲げて之を論ずるは、金澤市のために怒る

に非ずして足下の輕卒と傲慢とを責むる也。足下嗚つて曰く「諸士は果して常識を具備せるや」と、僕は敢て問はんと欲す、自ら省みずして此の如き輕侮の言を弄する、足下自身果して常識を有せりや否やと。更に足下は「金澤人士の行動に關して説なきに非」ざるを約せり、委しく其説を聞くを得ば魯鈍僕の如きも希くは悟る所あるを得ん乎、さらば次號の誌上に於て再び高説の現るるを待たん。

最後に僕は足下に對する箇人的好意を以て敢て足下に勸告す、足下若し自己の非を悟らば速かに雜誌部及び演說部の委員の任を辞せよ、これ足下がせめても其跡を潔うすべき唯一の道也。今に及びて之をなすは頗る遲きの感あれども、遲しと雖も爲さざるには優る。足下の賢明なる能く僕が忠言を容れなば幸甚。

忽卒の際推敲に暇あらず、文字蕪雜を極む、

足下乞ふ諒せよ。

(附加。加能同志會員中には學生の外に猶數人の教官を含む、されど此等諸先生は今回この事柄には全く無關係也、こは言ふ迄も無き事なれど万一累の諸先生に及ばんを恐れて特にこれを明言す。又此文に關する責めは僕一人にあり、加能同志會は與らず)。

何ぞや

校風發揚とは何ぞや。

苟も一校の風紀を改善して穩健の美德を獎勵せんとする、宜しく堂々として其主義を標榜せざる可からず、眞摯の態度を執りて其進退を明にせざるべからず、然らずは是れ、名は則ち美なりと雖も、其實は稱するに足らず、聲は則ち大なりと雖も畢竟虛聲ならんのみ。北辰校裡輕舉あらしむべからず、妄動あらしむべからず、

假し夫れ精細なる事實を探究して間然する所なく、確乎たる理由を標榜して遺憾なからしむるなくして、猥りに男兒の額上に鐵拳の驟雨を注ぐあらんか、輕舉に非ずして何ぞ、妄動に非ずして何ぞ。説くを休めよ吾に正當なる理由の存するありと、然らば敢て問はん、正當なる理由とは何ぞ、聞くが如くんば、是れ或る一派の人士が勝手に定めたる理由に非ずや、勝手に定めたる法規を以て恣に人を律せんとす、僭越に非ずして何ぞ、勝手に作りたる理由を以て猥りに人を賊せんとす、越權に非ずして何ぞ。

聞説く、校風發揚の美名を飾りて、擅に其の勢力を扶植せんとする者ありと、吾人は斯る風説を信する者に非ず、否我四高の名譽の爲めに信賴するを欲せず、然りと雖も不幸にして若し事實なりとせんか、吾人は飽くまで其謬妄を打破せざるべからず、極力反抗の氣焔を揚げざる可

からず、所謂武裝して立ち以て是等の固陋者流を一掃せざる可からず、何となれば、斯の如き所謂校風發揚其物が業に既に校風を惑亂するものなるべければ也。噫々斯の如くにして眞に校風の發揚を期し得べくんば、天下亦何事か難しとせんや、記せよ、北辰校六百の健兒は一派の人士の傀儡に非らざる也。(は、し生)

何の値ぞ

假し自己を省るなくして猥りに人を律せんとする者あらは、抑も是れ何の値ぞ。

古の明德を天下に明にせんとせし人は、先づ自己を修めき、斯くして彼は天下を泰山の安きに置くを得たり、彼の紛々たる俗兒、自ら高く止まりて世を睥睨し、一種の勢力を利用して縦に人を壓迫せんとするの輩、當に愧死すべきに非すや。

反省せよ、更に反省せよ、果して人を律するの資格ありや否やを檢せよ、果して人を抑壓するの權利ありや否やを熟考せよ、而して後徐に爾の手を下すも未だ遅しとせず。猥りに剛健を衒ひて粗暴に流れ、己を省みずして他を嚙々するか如きは、志ある者の斷じて執らざる所也。吾人は少くとも北陸最高の學府の學生也、好んで短褐を着け弊衣を纏ひて古狂生を學び、

兒戲に類する行動を敢てして恬として耻ぢざる

輩は抑も何等の意ぞや、吾人はゼントルマンなり、少くともゼントルマンたるの自覺なかる可からず、斯くして吾人は、吾人の品性に不斷のリアインメントを加へつゝ瞬一瞬向上するの意氣なかる可からず。

噫夫、校風の沈滞せしや久し矣、是を匡正し發展せしめんとならば、宜しく公明正大の道を取れ、斷じて姑息の手段を執るべきに非ず、權

謀術數は小策士の弄ぶ所、蛙鳴蟬噪は士君子の潔しとせざる所、若し夫れ俯仰天地に恥ぢざるの徒は、破邪の劍を提げて立て、正々堂々として驀進せよ。

吾人は所謂校風發揚が眞に憂校の士の覺醒の聲ならん事を切望して止まざる者也。(は、し生)

何の謂ぞ

假しカイゼルの物をカイゼルに與へ、神の物をもカイゼルに歸せんとする者あらば、吾人は寧ろ其偏狹なるを憫殺せずんば非ず、敢て問はん、軟文學の跋扈とは果して何の謂ぞや。

蓋し吾人が曠大無邊なる宇宙の間に生れ、神變不可測にして端倪すべからざる萬象に對するや、吾人の思想は渾然として天外に飛び、倏忽として我に歸する時、發しては詩歌となり、遡りては信仰となり、以て天地の美を闡明し、以て

絶對平安の地に到達せずんば止まざらんとす、是れ洵に人の人たる價値の存する所に非すや。北辰會誌上軟文學の跋扈とは抑も何を意味するか。再び問はん、或は星を歌ふを以て軟となすか、董を愛するを以て軟となすか、説者果して星の詩的價値を知れりや、董の美的趣味を解せりや、或は宗教を論ずるを以て頓馬となすか、哲學を論ふを以て迂遠となすか、乞ふ先づ哲學宗教の何物なるかを研究せよ、せめて其の概念を捕へよ、而して後に是を論ずるの排すべき所以を明にせよ、事茲に出でずして漫然是を排斥し去らんとするは、寧ろ偏狹也、無謀也、僭越也、心靈の自由を束縛するもの也、斷じて宥す可からざる也。

雖然、幸に誤解する勿れ、吾人は彼の猥雜なる卑俗文學を悦ぶ者に非ず、寧ろ絶對に排除せんと欲する者也、吾人は信す我が北辰會雜誌上

斷して斯る文學なかりきと。假し不幸青年を蠱毒すべき文學に逢著するわらんか、何を苦しんでか速かに握り潰さざる、何を慮りてか没書にせざる、二三文學嗜好者の爲めに多大の頁を割く必要何處にかある、文苑をして軟文學の巢窟たらしむる理由何れにかある。吾人が聞かんと欲する所是耳。

憶ふに文學は夫れ自身の世界を有す、何ぞ區々たる毀譽褒貶を意に介する者ならんや、雖然、劍を翳してせまる者には劍を以て應せざる可からず、斷じて二三人士の偏狹の爲めに文苑の神聖を蠱毒せしむべからず。北辰校裡幾多の文士起たすや、起つて而して大に歌はずや、潺湲の美音可也、迅雷の怒聲可也、何を青春の血潮を漑ぎて文苑の神聖を保護せざる、何ぞ死灰の如くに冷然として黙せる、西哲曰はずや、筆は劍に勝ると。(は、し生)

續 暗 流

○假りに若し素行修まらざる墮落漢の或る團體の中に存在したりとせよ。假りに其團體は社會の中堅を作りさるべからざる天職を有し、其の團體の一言一行は世人の沿く道徳的眼光を以て精細にこれを觀察し、沈重の態度を以てこれを論議し、團體自身もその職責とその抱負とを自覺して、一舉手一投足の末事に至る迄てその尊嚴を維持し世人が敬愛を失はざらん事を期待して切實なるものありとせよ。假りに團體は空しき鳥合の衆にあらずして整然たる統一機關の下に活動し、統一機關の長官が意志の本に去就を決し、整々肅々、一糸の亂るべき無く無限の進程を趁ふ者なりとせよ、而して假りに一墮落漢の行爲は未だ全く的確なる證明の許に繋ぎ能はず、統一機關の力を以てこの曖昧朦朧たる事實を審査し處分し能はざるありとせよ、而して

假りに團體の一部の者はかゝる事實を不快とし、團體の尊嚴を維持すべく且つは將來團體各員の行爲に戒むるわらんとして、何等の規約なく何等の通謀なく突然群集の面前に於て、毆打し、激刺し、痛罵し、わらゆる暴行を加へて混亂を極め、喧争や怒氣や悲鳴や叫喚のために、豫て通謀せる一部の者が知らず顔に來つてこれを仲裁し、この暴舉に對して被害者の復讐心の動もすれば一種の問題を惹起せんとするを防衛したりとせよ、若し假りにこの事實は大なる影響を團體の上に及ぼさん恐れて、團體機關の一部は、たゞ團體の一部か一個人にや、眞面目然と戯れか、りしのみとして黙過するありたりとせよ、若し假りにこの暴行は其の團體を殆んど代表するに近き一黨類の意志に出て、亂暴を加へ鐵拳を施したるの故を以て恰もこれを宗教儀式に用ふる神聖なる靈水の如くに考へ、この被害

者をその黨類の一員に招きて、永くその暴行の惹起する恐ろしき結果を逃れんと陰險なる手段を弄するありとせよ、更に若し假りにかゝる暴舉か團體成立已來會て非らざる事にして、永く温健にして着實なる團體が氣風に一種殺伐の風を感染せしめんとし、たゞに一度の暴行として影を取むるあらずとせよ、然らば吾人は如何なる方法をとらざるべからあるか、吾人は知らず、吾人は全く何物をも知らず、然れどもこはたゞ假定のみ空想のみ杞憂のみ假定空想より起る杞憂を排除する手段と知らざるは、會て玉手箱の裡を知らざりし浦島の事蹟か現實の世界に何等の影響を有せざると同様なり、何の苦慮かあらん、正に恐ろしき夢に襲はれて醒めたる人の如く心の底より喜ばざるべからず、吾人亦理性を有する士の快諾し得るを信す、

○罪惡に二種あり、一はたゞ心内の者にして他

は心外に發現せられたる者なり、前者は重に宗教上の罪惡にして道德上の罪惡亦これか一部をなし、後者は法律的罪惡その中堅をなし徳義に觸るゝ罪惡復これか一部をなす、前者か罪惡に對する制裁とも稱すべきは自己内心の苦痛にしてこれか根本的救濟は懺悔にあり改心にあり果た善行にあり、後者に對する制裁は法律上の處分なり團體若しくは個人より罪過あるもの地位信認を表面上又事實上に取消することなり、而してこれか救濟の方としては如何、試みに外面に顯はれたる罪惡は外面に顯はれたる制裁を以てこれを除去し得るとせよ、其は他人の財寶を掠奪する惡漢を捕へ、彼か暴行の直接に現はれたる其の雙手なるの故を以てたゞこの雙手をのみ苦めて刑罰を全ふしたりとするものあらば其は笑ふべき者なり、然り罪は外界の罪なり、然れどもこの禍根を尋ぬれば精神にあらすや、雙

手にのみ刑罰を施すも全身は關係にその苦痛を覺ゆる如く、外界の罪惡に對する外界の制裁も多少は關接の結果としてその功力を精神に及び得ると雖も、其は恰も明鏡を左右に振動せしめて以て鏡面に映する万象の實體を左右し得たりと見るゝ愚のみ、禍根にして全然内心にありとせば銳意以て内心の匡正に勉めざるべからず、懺悔せしめざるべからず、改心せしめざるべからず、善行に歸らしめざるべからず、或は以て迂遠となす、然り迂遠なり、人間の心底より改悔せしむるは新らしき人格を組成するよりも迂遠なり、迂遠なれどもこは唯一無二の手段なるを記せよ、吾人は一切世上の法律制裁を云爲せず寧ろ必然の數にして彼を是認せんとすれども、理想的道義的果た崇高なる情操的團體に於てかゝる行為は將來永遠に絶對的に排斥せざるべからず、嫌焉蛇蝎せざるべからず、憤然とし

て千里の遠方に離散せしめざるべからず、皇帝の物は皇帝に歸さるべからず、神の物は神に歸さるべからず、物質を以て精靈を支配せんとする者は即時に破壊するに非らざれば其れ以上團體を蠱毒せずんばやまざるなり、○近來兒戯に類するは他國の墮落呼はりなり、我國自慢はさる事ながら他國を貶するに到つては禮を過るの点に於て各あり、全國何れの處か墮落せざる、試みに京都に遊ぶ者に其の風儀を問へ、潔白にして廉直、温厚にして、而も魏然、若し夫れ祇園圓山の光景と風儀に至つては殆んと光風霽月の致ありとの解答を得る者果して幾人かある、大坂然り名古屋然り東京固より然り、取上げて區々金澤をのみ論すべけんや、若し最も學生を蠱毒するものは京都にあらず大坂にあらず名古屋にあらず乃至廣島にあらず、金澤にあらず、多く學生が心酔する東都たるを斷言して

過らざるに近きか、而してこは東都の短にあらすして文明の裏面なれば詮なきが如し、然れども事實は事實なり、これを公言するに於て何等臆すべきなきも先づ社會風儀の大体を知りて而して後に否一般社會より要求し得らるゝ度を以て現時の金澤を論すべきのみ、金澤も亦聖賢のみの竹林に非らざればなり、度を以て議論の標準とす、吾人最もこれを忌む、然れども人は相容れざる本性の上に確立せんとす、勢ひ度を以て思想行動の標準とせざるべからず、人生悲劇の多くはこれか爲めなり、解けて紅涙となるはこれか爲めなり、散して微笑となり大笑となるも亦これか爲めなり、自己か潔白なる部分を觀せよ、更に汚点に満ちたる領域を省みよ、而して他人の行動を批難し稱揚し罵嘲し讚美せよ、自覺は論理の力を借らずともより誤らざる判断を惠む、暫らく自省せよ而し

て後に論難せよ、自覺自省とは仰々しき大悟徹底式の謂にわらず、たゞかりそめに自己か叫ひの聲に聴け (空山白雲洞主人)

管見者

憫笑すべし管見者流の輩、自ら井底の痴蛙たるを悟らず、徒らに曲筆して輕跳兒を煽動せんとす、然して一味の彌次連これに雷同附和して其愚を益大にせんとす。憐むべきかな管見者流の輩、彼等固より文藝に對する態度を知るに非ず、否解する能はざる也。能はざる故を以て直に文藝の神聖を犯さんとする、あく誰か鳥の雌雄を知らん。聲大なるが故にこれを偉なりとする者あらば請ふ卿等來つて廣告隊の樂譜を傾聽せよ。教へんか管見者流の輩、廣告隊のそれを以て最上の樂譜とする卿等なれば文藝を以て男子の

手にすべきものに非ずと早呑込するは理の當然なりと雖、抑卿等男子の職責を自覺せりや。夫れ文學の神髓は韻文也、韻文を他にしては純文學無し、若しそれ韻文を解する頭が無くば降參と申しいづべし、自家の罪を他に嫁せんとするに至ては三尺の童子すら猶且これを恥づ。況んや六尺の丈夫に於てをや。詩歌は古へより才媛によつてもせられしものありと雖、その數僅に指を屈するにも過ぎず、國に殉する女丈夫の少なきと同一事のみ。若し國家を經營する事男子の職責なりとせば豈文藝の事をも女子の事として捨つる暴あらんや。故に教ふ管見者流の輩、知らぬを問ふは恥ならず、されば膝を屈めて教を乞ふべし、世の中は卿等の如き管見者のみなり、と思へばこそ間違も起れ、天人を合一せんとする文藝の士は喜んで卿等を導かん。(曙子)

軟文學者に與ふ

軟文學者足下、僕生れて粗笨、前號雜報欄に於て排軟文學を唱ふるや其の説稍く露骨に過ぎ、世評爲めに喧々、特に軟文學諸君の手痛き御苛叱を招きたり、僕罪死だも辭せざるべし、然れども翻つて思ふ、僕果して罪ありや、軟文學果して排すべからざるか。

軟文學者足下、

僕軟文學を論するに先ち僕の資格に就いて一言せざるべからず。僕は第四高等學校英法三年生なり、僕は生れて校に教を受くること茲に十有五年、性頗る頑愚なりと雖も大抵の物事は解る位に教育せられたり、此の点に於て軟文學諸君も其の資格に大差なきを確信す。僕亦生れて文學を嗜むや切也、僕今や賢明なる諸君の如く大文學者の卵にあらずと雖も、嘗つては一管の筆

を提げて宇宙の玄理を啓き神秘の殿堂に闖入せむかとさへ企てたる者、僕豈文學に憬憧せざらむや。たい諸君と同様未だ文學を解し得ざるのみ、宏量なる軟文學諸君、諸君は諸君のみが文學を解し、不肖河合良成が文學を解せざるを論據にして僕の説を駁するなくんば幸也、軟文學者足下、

僕の資格を聞いたる諸君は更に該問題の範圍について傾聽するに吝ならざれ。僕固より文學を愛す、豈堂々たる天下の文學者に向つて敵意を有するの理あらむや。只僕は校紀消長の反射鏡たるべき、北辰會誌上に於ける軟文學を排するのみ。北辰校の現狀を天下に告白する唯一の機關たる北辰會誌上に於ける軟文學を排するのみ。極めて慎重なる、決して輕々に事物を早合点せざる軟文學者諸君、僕の所説を以て天下の文學者連を侮辱し、文學の神聖を瀆したる者と

なし、蛙鳴蟬騒に等しき言辭を弄して文學不可
侵論を擔き廻らすば幸也。

軟文學者足下、

諸君は既に僕の二前提を會得したるべし、今や
僕は自由の翼を得たり、僕は思ふがまゝに軟文
學に向つて三十棒を喰はせむ、僕退くか軟文學
者敗るか、僕若し敗るるあらむか僕は潔く北
辰會誌上を退かむ、軟文學者諸君若し敗るるあ
らむか、諸君は軟筆を火に投じて同類相卒ゐて
決然壇上を退かざるべからず、人生到る處青山
あり、廣い天下に諸君の軟文學を盛に歡迎する
軟文學崇拜國亦なしとせす。

軟文學者足下、

文學固より喜ぶべし、詩歌固より尊ぶべし、文
學は思想の泉源より湧き出づる清流也、其味や
清冽にして甘美也、詩歌は實在の谷に起れる神
秘の反響也、其音や幽秀にして崇嚴也、嗚呼吾

人文學を味ひ詩歌に酔ふ時、吾人に自他なく、
物欲なく、超然雲中に徜徉ひて仙に接せるが如
し、故に僕敢て曰はむ、文學は絶対に其眞價を
有する者にして、文學者の天職たるや極めて崇
高偉大なる者なりと。僕亦自然美の極端なる頌
讀者なり、美的生活は僕の憧憬して止まざる所、
僕不肖と雖も豈生命を相對に、求めむとする者な
らむや、僕の苦慮する所其の絶對の何れの部分
に求むべきかの問題にして、相對絶對何れに求
むべきかの問題にあらざる也、

僕の文學を重んずる、しかく夫れ大也、然れど
も僕は凡ての文學を尊はず、其尊ぶ者は傑作の
み、名著のみ、少くとも赤き血汐の凝固してな
れる熱烈の歌にあらざれば、清き涙滴の氷りてな
れる悲壯の文のみ、此を文學全躰より見れば眞
に九牛の一毛のみ、九牛より一毛を減じたる殘
額幾百万毛はガラクタ文學のみ、文學として

文章として二束三文の價値あることなし、ガラ
クタ文學は須く荒繩に絢ひ、荒菰に包み、屋根
石を附し、鹽ふりかけて淵に沈むべき也、鼻汁
をかみ、唾を吐き、石油を引さかけて火中に投
ずべき也、況んや紛々軽々、吹けば飛ぶか如き
婦女子的軟文學は眞に三文は愚か半文の價値な
き者なり、豈價値なきのみならむや、青年を蠶
毒し、社會を紊し、人情を輕浮ならしむる等其
弊の及ぶ所遂に言ふに忍びざる者あり、而も軟
文學者諸君は或は事を人情の至微を穿つに借
り、或は戀の神聖を論ずと稱し、若くは新躰詩
と稱する美名の下に隠れ、文苑と稱する尊き園
に彷徨し、我は天才也、我れ筆に万代に生きむ
などと呼び、我れ天地を解し得たり、我れ悟道
の幽理を窮めたりなどと叫び、輕々筆々、口
半文學を謀々して底止する所を知らざる者の
如し、あゝ何等の痴態ぞ、何等の醜狀ぞ、あゝ

色青ざめたる軟文學者諸君、諸君は青年なるや、
諸君は男子なりや、諸君の血管には血の流るる
ものありや、例へ血管内血の存するものあるも
其は流るる血にあらざりて氷りて止れる血なる
べし、火に燃ゆる紅の血汐にあらざりて死神に
通ふ青色の血なるべし、あゝ眼球洞穴の如くに
凹める軟文學諸君、諸君が幽鬱なる一室に坐し
て、妄想を恣にせる時を割いて乞ふ、活潑なる
日光に接せよ、日光に接して日光の美味を知れ、
然る後幽陰なる諸君が机前塵芥の積重する邊に
思ひ到れ、僕は諸君が再び軟文學に呻吟するの
勇なきを知らむと欲する者なり、あゝ優美にし
て温雅なる軟文學者諸君、諸君は美を説くと雖
も戀を語ると雖も諸君の美や戀や凡て此れ無骨
漢の美のみ、戀のみ、試に諸君が纏へる偽文學
と稱する華麗にして優雅なる美衣を脱せよ、僕
は諸君が果して骨片と稱する一骨片をすら有す

るかを檢しま欲しき者也。青年は天秤也、動かすば必ず腐る、進歩せずば必ず退歩す、青年に於ける進歩退歩の二名辭は反對語にあらずして矛盾語也、其中間の立言を許さず。故に苟も吾人が退歩を免れ、墮落に遠ざからむと欲せば必ずや進取的、積極的行動に出ざるべからず、内界に跋扈せむとする魔を快刀亂麻と切り拂はざるべからず、切り拂ふも薙ぎ拂ふも其の跳梁を逞しうせむとするは此れ心界の魔にあらずや、況んや敢て此を拂ふことなく、消極的に抑壓して一時の苟安を求むるに於ては其跳梁や遂に度すべからず、あたらず有爲の青年を驅りて墮落の深淵に陥らしめずば止まざる也。

軟文學者足下、青年はしかく危殆なる者たり、弱点多き者なり、然らば軟文學の青年に及ぼす影響やいかに、

試に史に徴せよ、諸君は軟文學の盛なる國必ず衰へたるを見む、試に地圖を閲せよ、軟文學の隆盛なる地方、必ず墮落せるを見む、此を卑近なる例に見むに、全國各高等學校校友會誌に於て軟文學の跋扈せる學校ほど生徒に意氣なく活力なく濛々然として喪家の犬の如からざるはなし、特に吾北辰校を以て其最たる者なりとす。然り軟文學風吹き荒ぶ所野に青草なからむ也、世に青年なからむ也、人は凡て枯顔白頭の憔悴兒と化し、人生亦男子を見るを得ざらむ。何を以てしか云ふ、軟文學は心界の魔を養ふ糧食なれば也、理性の力により、意志の働により、辛うじて其姿を潜めむとする心魔も、生温き軟風に遇ふや、心氣頓に加はり、奮然として其の姿を再現すれば也、實に軟文學は精力を滅殺し、希望を消滅せしめ、青年を驅つて沈滞枯稿の黨と化せしむる者也、あゝ恐るべき軟文學は、青

年の弱点より墮落界に向へる一條の水脈にあらずや、軟化して油の如くに溶解せる青年は此の水脈に乘じ、滔々相率ゐて墮落の深淵に走らむとす、あゝ心魔を斬らむと欲する者は須く先づ軟文學を排すべき也、青年に向つて向上の道を教へむとする者は須らく先づ軟文學を排すべき也、軟文學をして一日の生あらしめば青年より一日の生を奪ふ者なり、軟文學をして百斤の重さあらしめば青年より百斤の重さを減する者なり、軟文學を味うて憔悴踰跟たる青年が、躰量なく骨骸なく、面に白粉を施し、身に錦衣を纏ひ、輕々翻々乎として紛々界に羽化する時は即ち此れ軟文學の天下を風靡し、軟文學者の鼓腹を叩いて太平を謳歌するの時なるべし。あゝ戦慄すべき哉軟文學、排斥すべき哉軟文學者、百篇の軟文學を火に投するは千人の青年を救ふの道なり、千人の軟文學者を穴に投するは万人の

青年を救ふの道也、燒かむ哉軟文學、坑せむ哉軟文學者。

軟文學者足下、足下等が二三年來物せし北辰會誌に於ける文學は殆んど軟文學のみなり、特に文苑を中心としたる、軟文學は殆んど僕の燒棄すべき性質に屬す、彼等は無用の寢言にあらずば有害の言辭のみ、僕北辰會誌を閲するに當り、未だ嘗て自ら好んで眼を文苑欄に注ぎしことなし、其の眼を注ぐは殆んど委員としての義務的觀念にあり、故に會計報告をまで讀み終りて後にするを常とす、而も余の如きは比較的其の忠實なる者、北辰會員六百の中興味を以て軟文學に眼を注ぐもの如き果して幾人かある、余は明に指を屈するに足らざるを信せむと欲す、あゝ「北辰會誌に投すべし」と叫ばしむるに至りし者果して誰の罪ぞ。

軟文學者足下、北辰會誌は作文の演習場にあらず、自己の作文演習以外何等の目的を有せざる文章は此を會誌に載するの要なき也、少くとも六百の會員、數十の特別會員、及び之が配布を受くべき幾多官公の諸學校を眼中に置かざるべからず、大膽と稱せむか厚顔と云はむか、果た宏量と云はむか、無鉄砲と稱せむか、幾多賢明なる軟文學者諸君は會員多數の輿望に反して恬然として顧みるを知らざる者の如し、僕固より無鉄砲を愛す、それは僕既に無鉄砲なれば也、然れども世の中は無鉄砲のみにては眞に暗夜に鉄砲なり、時には遠慮を必要とす。僕今軟文學者諸君の膝下に此の遠慮と稱する藥品を呈上せむと欲する者也、宏量にして寛仁なる軟文學者諸君、幸に僕が贈る所を納めて朝夕の服用となさば僕の幸此れに過ぎざる也。

鞭聲錄

(強ち我誌上の出來事と云はす世に文學の意義

(河合良成)

を知らずしてこれを排する徒ありと聞く) さすがに敢て文學を排すと云はすして一種の文學と云ふ、一穴を塞がるれば他の一穴に遁走するの智は屋根裏の幼鼠尙これを知れり、徒に標榜を見てこれに和するは塵埃煙ふる白道の外には左右の幽林溪谷を見る能はずして、却てその存在を否定する馬車馬流の見識に近からざるか、昔老馬あり、彼か智群馬にすぐると、彼獨斷の全能論を振り回して曾て見ざる、莊麗の幽境を批難し排斥し嘲罵し以て一生の快事となす、これを呼んで頓馬と云ふ、

然り文學を排するにあらず、一種の文學を排するにあり偏心なき吾人は元よりこの表號を稱讚し快諾する事一派の人士に譲らざるべし、蓋し高尚なる文學は常に吾人が趣味を涵養せしむると共に卑近なる者は又吾人が劣情を發展せしむる事恰も巴豆の劇毒となり靈藥となるもの存す

れは徒らに吾人が嗜好に耽りてあらゆる文學を嘆稱する事吾人の屑とせざる處なり、然れども一度その所論に窺ひ到りてや啞然として言ふべきの辭を知らず、

文學の意義を解せずして猥りにこれを排除し去らんとする憐れむべき賢明の士よ、卿等か短慮と輕卒とを云爲するを好まざる吾人は、又卿等か斯道に對する趣味と尊敬とを誨諭するを欲せずと雖も、吾人は卿等か心情の寂寞と荒涼とを憫察して殆んと悵然たる者あるを記せよ、賢明なる卿等に向て今更文學の神聖を説き藝術の自由を論し詩歌の幽遠を教へ哲學の玄妙を論すの愚を知ると雖も、卿等か果斷なる文學觀は吾人をして改めてこの迂拙を敢てせしむる迄に幼稚なり、愚蒙なり、不具なり、危険なり、卿等か所謂軟文學として排除せんとする處の者は不幸にして文學の中堅を作る者なり、卿等か婦女

子の文學として驅逐せんとするは卿等よりも尙
 崇高なる情緒と幽麗なる趣味とを有る人士が衷
 心より迸發せる天真の絶叫なり本來の鳴動なり
 所謂策畧を絶し所謂權謀を忘れ區々たる名利を
 放棄し、紛々たる俗臭を脱却し、凜然として秋
 毫も冒すべからず、儼然として一塵も汚すべか
 らざる自己絶對の要求なり、心情活動の表現な
 り、賢明にして而も所謂常識なる卿等に、吾人
 か言辭の晦澁ならは、乞ふ、卿等よ卿等か自ら
 誇りとする假面を脱して自然の寵兒となり、後
 園に出て、枯草の間に薫る一莖の菊花に對せよ、
 精細に花瓣の輪狀をなして天使の舞ふか如くに
 中央の玉座を圍繞するを察せよ、晩秋の風徐ろ
 に來つて清香をあたりに亂たし、熟絹の光する
 花片のそよりにゆれて天地有情の詩歌この間に
 ひくを聞かば、卿等の感想果して如何、尙も
 薪木をかさし慨然として劍舞するの勇ありや、

賢明なる卿等は或は能ふとするもこれを庸俗
 の人に強ふるは餘りに錯雜せる問題なり、
 賢明なる卿等か所謂硬文學とは果して何ぞや
 恐らくはダンテに非らずホーマに非らず、ミル
 トンに非らず、バイブルに非らず、法華經にあ
 らず、詩經にあらず、李白にあらず、古事記に
 あらず、祝詞にあらず、況して人情の至微を衝
 き、彼等か豊富なる想像のみ好く到達し得べき
 葛藤の終局に於て蕭々として粟生せしむる悲壯
 美を描寫する近松沙翁は、人情の極致として卿
 等の蛇蝎する愛を尊崇するの故を以て彼等亦同
 一の論理の下に弔すべき軟文學とせずんば止ま
 ざるべし、あくかくして如何なる文學か、卿等の
 意を得たるものとして保護するを得べきか、
 吾人は再び恐る、賢明なる卿等か、硬文學と
 は、上杉謙信か遠征の詩か、八幡太郎か勿來關
 の歌か、果た又薩摩琵琶の文句にあらざるか、

三軍の大將軍が泥酔して曲らぬ舌の根にの給ひ
 しと傳へらる、傍若無人の法螺にあらざるか、
 中たらずと雖も蓋し遠からざるべし、かゝる硬
 文學を吾人に要求するは餘りに賢明なる卿等に
 似けなき舉動に非らずや、賢明なる卿等よ、願
 くは吾人の爲めに記せよ、五條の橋に千人切を
 試みたるは數百年の昔なり、江戸城を睨んで齒
 の根を噛みしは數十年の昔なり、記せよ、時は
 今明治三十九年の末日なり、岩の根を噛むとも
 卿等か希望と主張とを貫かんとせば、暫らく去
 つて臺灣の蕃人に入れ、彼等の文學や卿等か
 要求に應すべければなり、若し意に飽かすとな
 らば更に去つて亞弗利加の中央に進め、蓋し卿
 等の所謂硬文學淵叢の土地なればなり、卿等の
 意果して如何、

らんや、若し文學の神聖を卿等によりてや侵害
 せられたりと憤る士は或は卿等と呼んで野次と
 云はん、然れども吾人は卿等の爲めに彼等に辯
 護せざるべからず、文學も發展するに従ひて多
 少は晦澁に赴くべし、かゝればこそ一讀その意
 を得ざる者は文學は文學自身の爲めに存し必ず
 しも人間心靈の聲にあらずと揚言するを耻ぢざ
 るに到れり、然れども文學は科學工藝と其の性
 を異にし文學自身の爲めに存するにあらず、人
 間必然の要求の發顯たるを永く賢明なる卿等か
 明断なる頭腦に印象して再びかゝる愚を敢てせ
 さらん事を勸告す、請ふ卿等幸に再考し更に三
 考せよ、
 吾人敢て毒筆を弄するを欲せんや、然れども
 卿等か言論の蒙昧は遂にこれを吾人に強ひたり、
 夫人來つて卿等か頭上に鐵拳を加へたりとせ
 よ必ずや勃然憤然として卿等は其の理由を詰り、

得されはこれ罵し冷笑し時に又鐵拳を復讐するの暴舉に出つべし、

若し賢明なる卿等よ、突然未熟なる屁理屈を以て卿等が尊重する主義を批難攻撃し、一犬虚を吠わて万犬實を傳ふる現世に於て、邪道なる彼等が正に一種の力を扶植せんとするに際して卿等果して何をか成さんとする、常に肉体よりも精神を過重する吾人は肉体の壓迫よりも更に苦惱を精神の制抑に感ずるものなり、況んや吾人か一世の理想とし慰安とし信仰とし希望とする文學に關するものあるに於てをや、時に卿等に禮を盡さざるものあるはその至情なるのみ、吾人何んぞ卿等を輕んせんや、

至要なるか、自己か心靈に訴へて運動を心與より要求するや、將た至純至美なる詩歌を要求するや、人生の至靈なるものに對してサンダウか多く要をなし、イブセン果してこれに譲るや、梅ヶ谷はトルストイよりも高き意義を人生に與わたりしや、こは提灯の釣鐘に於けるよりも甚しからずや、若し吾人がかりに提灯の輕重を問ふ、而して卿等憤然として口を尖からず、況んや釣鐘の輕重を問はれたるに於ては、よし兒戯に類するも吾人亦赫然として顯はるゝ所あらざらんや、賢明なる卿等よ、卿等か趣味に通せざる心は、動もすれば壯嚴なる文學を婦女子の閑文字として追害を欲するあらば、それ已上の熱心こそそれ已上の理論とを以て常に卿等の自負する遊戯を無賴漢の所行と觀する吾人有るを知りて卿等か偏狹なる精神を融和せよ、吾人は必ずしもかく迄に運動遊戯を排せんとはせず、たゞ一種

の方便としてこの説をなすのみ、
要は頑迷を去りて詩歌の眞趣を体顯せよ、而して尙嫌焉たらざる者の文學に存すれば筆を改めて立論せよ、今に於て卿等か言論は畢竟無意義なり、吾人亦案山子に説去するの迂を欲せず

(し、じ)

覺醒錄

強ちに我か校裡と云はず、世上輕佻なる徒輩の壓迫を受け尙啞然として口を閉ぢ筆を束ぬる文筆の士なる卿等よ、同情すべき卿等よ、卿等はすでに文學に従事せんとする覺悟を有するの

と獨立を主張すべき人なり、吾人亦卿等かゝる覺悟に依頼せざるべからず、
温厚なる卿等よ、假りに没分曉漢の故なくして卿等か何處迄もその尊嚴を主張せざるべからざる文學を抑壓したりとし、盲千人の世の中に彼等の勢の猖獗なるものありとせよ、卿等はたゞ沈黙を以てこれかふさはしき復讐となすか、沈黙か雄辯に勝るの金言はこの場合に於て、死滅は奮闘に勝るの意味を有するに至るべし、温厚なる卿等よ、木刀を道場に振ひ人の頭を打つ事を以て無限の活動の如く信するは彼等の一部なり、木の切を以て球を曠野の一方に弄して以て人間至上の意義と信せんとする者も彼等の一部なり、杓子の大なる物を以て三尺の空の中に護謨球を投するを以て人間最高の元氣の發現と觀するも亦彼等の一部なり、やゝもすれば運動は人間唯一向上の階梯の如くに考へて温健なる

文學を婦女子の事業と論ずるは彼等の一部なり、雅量なる卿等は或はこれを容れんとするも欺く可らざる卿等か心情は果してこれを満足し得べきか、見よ、轟然として朔風の北海に渡れば憤然として百万の怒濤は頭をもたげずや、撃たるものは立ち耻かしめらるゝ者の起くるは天地万象の法則なり、豈意を抑へ情をかゝめて頻りに超然をつとむべけんや、若し卿等が衷情に於て良心の欠乏するあらは吾人亦何か云ふべき、然れども卿等は吾心の愛慕する如く良心の叫喚をその儘口舌に上し能はざる迄に温厚なる人なり、温厚は美德なりと雖も又卿等か主義信仰に最も冷膽なるは是あるか爲めのみ、主義は個人の生命なり、生命を侵害さるゝも尙所謂温厚ならざるべからざるか敢て卿等か英斷に托せて吾人又何をか云はんや、

卿等よ、吾人は曾て卿等か或る者の机上に横はる鷺毛の筆のつふやくを聞けり、彼等鷺毛は其主人の文人たるを聞きて隷屬せる始めに於て光榮なる彼等か運命を謳歌しき、鞘を出て純白なる紙片に向ふや彼等は如何に多くを彼等か先端より進出すべきかを思ひぬ、幽艶の文學は爛漫の花と亂れ、森嚴なる言句は曠野の秋霜の如くに連なり、憤然としては顯はるものは怨府の火炎をなして狂い、欽然として微笑む時は紫竹のそよ風に友磨するか如く、亂れては雪と舞ひ、凝りては月と輝やき、狂ひては嵐とたけり、眠りては霞となびく樂さに彼等自身の役目をも忘却して初めの程は戦ひぬ、然れども彼等は落膽せり失望せり、彼等の要務はたゞ必要品の請求と寒暖雨雪の報告とにのみ使用せられぬ、あゝ彼等の苦痛又察すべきにあらずや、

温厚なる卿等 焉くんそ涙を揮つてこの可憐

なる鷺毛か囁を容れざる、たゞに鷺毛のみにあらず、多くを豫期して卿等か卓上に上り來たれる白紙の、常に單語と數字とに彩色せらるゝ、不満も解けて、共々に大平の春を謳歌し得べき道なればなり、

温厚なる卿等よ、卿等か覺醒と奮闘とにより卿等か眷族の一切を喜悅せしめ、卿等か神龕を襲へる輕佻の徒を制せずや、(し、じ)

萬々失策に出候も私同志の者計り募り候へば三十人、五十人は得べきに付き、是を卒ゐて天下に横行し、奸賊の頭二つ三つも獲候上にて戦死仕候も、勤王の先鞭にて天下の首唱には相成可申私義本望不過之候 (松陰時勢論)

雜報

南下問題

挑戰狀の應答は來れり曰

拜復早速御返事仕るべきの處當校は過日來試験中に候ひしかば失敬仕候

既に御承知の通り御申込の期節には本校水上部の競漕會有之滿校の運動熱は全く其方に集注せらるゝ有様に候ふ、且つ水上部撰手中柔道擊劍の撰手を兼ねる者も御座候へば貴校との仕合は本校水上部にとりては少からざる打撃に御座候、

勿論花咲き鳥歌ふの好期節に貴校の健兒と相見ゆるを得るは實に逸する能はざる機會にして吾人の衷心熱望する處に御座候へば已に運動各部役員の集會を開き充分討議仕り居り候

間近日中に御確答仕るべく候左様御承知下され度候

終に臨みて貴校運動部の御隆盛を祈り候

第三高等學校嶽水會運動部

近日中の確答!!!雨か霞か吾人此を知らずと雖も、吾人は昨年の拒絶に懲り、輕舉を犯して六月間以前に挑戰狀を出せり。若尚ほ昨年同様の理由を以て峻拒に遇はむか此れ既に吾人の罪にあらざる也。

勝敗は天のみ、吾人の眼中三高との勝負ならずして只其友情なるのみ、勿論吾人と雖も負くるより勝つを好む、僅に、勝つよりは、大に勝つを好む、好むは情のみ、情は以て禮に越ゆべからず、

此れ吾人の眼中勝敗なしと稱する所以也、北國の冬は雪の天地なり、野庭球の練習を試むるの時日なきは甚だ遺憾なりと雖も、一無聲堂尚ほ存するあれば柔劍道に關しては、吾人意を安

じて可なり、

柔劍、野庭の四部撰手（未だ未確定のものもあり）は殆んど不賛成者なきが如し、されば例へ各々四部有志者の南下なりと雖も實は北辰會四部南下と云ふと其間寸毫の差違をも認むるを得ず。

遠征の二大要素は戰鬪力と後援とにあり、撰手は勿論責を負ふて奮闘すべし、されば六百の後援者諸君は、全力を振つて其の後援の任務を完

せざるべからず、物質的に精神的にあらゆる便宜を南下隊に供せざるべからず。野庭球練習の爲めに全校舉つて校庭の雪除けの手傳位はして

欲しき者也、一皿の菓子も節して撰手往復の費用位は支辨してやりたき者也、尚ほ望ま欲きは應援隊の出陣より、京都流車賃は割引（百名以上）せば往復貳圓五拾錢に足らざるべし、滞在費の如きも共同的滞在をなさば金澤に滞在する

と大差なかるべし、而も戰局に及ぼす効果に至りては實に偉大なる者存すべし、通常會員たると特別會員たるを問はず閑暇ある人は悉く來れ、來り而して健兒飛躍の舞臺に、一層の光彩を添へよ、（河合生）

第十四回陸上運動會記事

（K、K、生）

去る十一月三日を以て舉行の豫定なりし我が校の第十四回陸上運動會は雨天の爲め四度延期し最後の決定日なる同十一日を以て愈開催せられたり、

此の日朝來一天拭ふが如く秋空には珍らしき好晴なりしかば曉告ぐる頃爆聲三發夢を破り開催を報しぬ、前日來の雨天に齒を喰ひしめて無念がりたる全校の喜悅一方ならず、午前七時頃より夫々準備に着手し同八時過ぎ豫定の番組に

據り勇ましく競技を開始し第十八回の福引競争を終つて晝飯の爲め約四十分間休憩し午後一時第二十回より始め最後の第四十二回一哩競争まで首尾能く舉行し一同場の中央に集合し君ヶ代の唱歌を奏し夫より万歳を唱へて全く退散せしは八時頃北星一顆尾山城頭老松の梢に輝く折なりき

その競技に於て一等賞の月桂冠を獲たる名譽の諸士は左の如し、

- 1 二丁、守山、2 武裝、谷中、3 戴囊提灯、
- 林、4 四丁、吉田、5 學術、木谷、6 旗取、
- 江守、7 二人三脚、8 障礙物、鈴木、9 二丁、村上、10 福引、江守、11 戴囊提灯、
- 宮崎、12 重荷、菅原、13 制歩一丁、鈴木、14 幅飛、秋山、15 武裝、豊田、16 學術、無賞、
- 17 四丁、白嶺、18 福引、片平、19 一分間競争、
- 原、20 片脚一丁、久田、21 二人三脚、山根、

- 藤崎、22 馬飛二丁、鈴木、古屋、23 旗取、飯野、24 武裝、戸出、25 竿飛、新井、26 障礙物、
- 若井、27 戴囊スブン、石渡、28 六丁、渡邊、29 サック一丁、新井、30 一人一脚、鎌形、31
- 福引、久島、32 學術、高橋、33 二丁、香川、34 來賓提灯、山崎良氏、35 職員制歩、小谷先生、
- 36 旗取、米澤、37 擊劔仕合、白、38 公立學校
- 撰手六丁、工業學校、39 各部撰手六丁、二部、
- 40 一哩、守山、

右の内一部對三部の綱引は最も觀者の目を引きしが二三回引き合ひ未だ應援の聲を聞かざる中綱は眞二つに切断せられたりしは何かの深き意味を有せるが如く思はれ却て興ありき、擊劔野仕合も亦當日の見物なりしが瞬時に勝敗を決せしは余りに呆氣なかりき、公立學校撰手は何れもその校生徒の應援の聲轟々として終ます終に工業商業第一中學の順序にて賞を得た

り、第三十九回各部撰手こそ實に空前の偉觀なりしか、予をして少しくその光景を畫かしめよ第三十八回公立學校撰手競争終るよと見る間に豫て用意せられたる幾百の赤(一部)、白(二部)、青(三部)の應援小旗は忽然として場内に溢ぎれり、忽ち群衆を押し分けて場内に入り來れる一團あり、毛織緋染の大旗數本を先頭に手にく、大小の赤旗を振りかざし北辰校歌を合唱して場内を練り歩く、之れを一部の應援隊とす、之れと同時に二部、三部の應援團亦各自、青の大小旗を翻し威風堂々として殺氣場に充ち今や天下は三分せり、古唐土の三國にはあらねども何れ劣らぬ三團は互に場内を練り廻り赤叫べば青之れに應じ白萬歳を唱ふれば赤劣らじと旗を振る、群衆之れに和して喧々轟々耳爲めに聳せんとす、此の如き各部の示威運動、威嚇運動は繼續する事凡そ半時、撰手は準備全く整ひてス、

タ、トに整列したり、やがて特種の調を帯びたる「用意」の號令は發せられぬ、今や万雷鎮まりて場内何となく色めきわたる、吁々我が部の榮譽を双肩に荷ひて數十日来練りに練りたる此の身体今日此の時腕を試すの時に至れるなるぞと各撰手の胸の中「南無八幡大菩薩、別しては我國の神明日光權現、伊勢大神宮出雲の大社、願くはこの月桂冠を我れに得させ給へ、若し得損んずる程ならば頭髮悉く引き抜きて再び人に面を向くべからず、今一度人々に見えさせんと思召さば、此の機失はせ給ふな」と心の中に祈念せしか否かは疑問なれど決意の念面にあらはれて凜然と身かまへしたるけしき勇ましなぞいふばかりなし、

満場亦鳴りを鎮めて水を打つたる如く衆目悉く撰手に集まる所謂「大雨將に至らんとして風樓に滿つ」とは正に此の事なるべし

銃聲一發！撰手の身体は早や空を飛びぬ、予は此れ以後の事は能くは記憶せず、只第一週は赤赤白、第二週は赤白赤第三週の半ばに至りて白白赤の順となりしをのみ僅かに記憶せり其の他の事は少しも覺へず、蓋しごよめさわたる満場の聲に耳聾し、飛鳥の如き撰手の駛走を見て眼眩みたる故なるべし

此の如くにして二部の國拳、高井一、二等賞を獲一部松岡は三等賞を得たり

最後の二哩競争は本日第一の大競走、天黄昏れに近きぬ。競技者は皆満身の勇を鼓して飛ぶ、此の勝利を得しものを誰とかなす、曰く一部一年守山茂松と名る八町二郎。

野球部報

好球生

醫專一中二中連合軍對四高野球試合

吾は鵬圖を抱き來春關西の野球界に活躍せんとする四高の健兒。彼は各其校庭に其の技を練り術の鍛へたる醫專、一中、二中の健兒。戰機熟して彌々十一月二十八日試合を四高校庭に開き龍鬪虎撃大奪戦を試みた此日近來絶好の小春日和戰場未だ乾かざるに市下幾百の健兒早やくも校庭に充滿して未だ戦はざるに殺氣既に場内を壓した。さて此日の大試合は雨となるか風となるか。時は漸く進んで英姿堂々兩軍の諸將場内に顯はる時に審判官聲明かに六回ゲームを宣言し戦は開かれた

第一戰連合軍先づ攻む

第一に打つて出でたるは。醫專の猛將金子なり得意の快打二壘に強ごろを送て出で、あはや、名譽戦死を遂げんとするとき、嶮惡なるグラウン

ドの爲めに利を得て。からくも。一命を止め得たれども泥土を浴びたる仁王殿が果然一壘に顯

はれしは快觀なりき。金子直ちに二壘に迫らんとせしも後援者山田三振に斃れて壘を進めしむる能はず一中の好打手齋田此時奮然として現はれ出す。然れども惜む可し壯圖空しく栗田が怪腕に挫けて死し續く横山又々栗田に弄殺せらる

吾が軍代り攻む 今日先陣は老將鈴木なり彼れが悠然たる長驅は碎けん計りの拍手に迎へられてバッターボックスに現はる責任有る攻撃に鈴木先づ四球に出で隙を見て。あはや、二壘に突入せんとせしに捕手山田の爲めに二壘に刺され渡邊又々四球の利を得て一壘を奪ふ海邊現はれてバンドに出でしも一壘に刺され渡邊二壘を奪ひ頻りに三壘に突入せんとす此の時後援者は

輕快なる藤崎なり連合軍大に守備を嚴にして内外相戒めしか如何にしけん投手武者が二壘への投球正鵠を失して遠く外野に逸し去る此の天祐を得たる渡邊逸早くも易々と本壘に突貫して此

の日の先登を叫ぶ藤崎四球に出で捕手のミスに利を得て生還し加藤敵將武者の弄ぶ所となりて第一戰は終はる

第二戰

連合軍の船木栗田が魔球に弄殺せられむとして辛らして捕手渡邊がミスに助かりて一壘に入る次で一中の名將平手フライをSSに送りて町田に名をなさしめ小泉藤村三振に共に枕を並へて死し船木立往生となる、

吾が軍代り攻む 赤羽死球の天祐を得て一壘に進み捕手山田のミスに乗じて幕進二壘に迫る此のとき不破見事なるバンドに出でしが赤羽を三壘に進めたるのみにして一壘に刺さる町田代るいでや三壘なる味方を生還せしめんと計りに打たる球は轟然鳴を止めて遠く一壘の後方に飛行す守將二中の横山章駄天に馳せて。はつしと。止めて球を一壘に投して町田を刺す、機を得て

赤羽易々と本壘に入る北國野球界其人有りとは知られたる好漢栗田笑を浮べて拍手の中にバツターボックスに現はる只惜しむらくは妙拔を演ぜずしてPゴロに斃れぬ、

第三戦

醫專の剛將武者味方の志氣の振はざるに怒氣心頭に發し年來の快打見事敵を驚かさむと勉めし甲斐なく投手栗田が怪腕熱球に弄殺さる金子山田共に好打手たるを失はずと雖も栗田が怪腕猛球魔球乗するに機なからしめ共に枕を並べて三振に倒る

吾が軍代り攻む 鈴木三振に倒れ渡邊が快打1Bと2Bとの間を強ごろに襲ひて易々一壘に入る隙を伺ひて二三壘を畧し頻りに本壘に迫る次ぎに敏將海邊武者の弄ぶ所となる渡邊隙を見て冒険本壘に入り敵のミスにありて生還す藤崎ごろを投手に呈して死す

第四戦

勇將齋田ロツティンフライをSSに送り町田がミスに乗じて一壘に入る隙を伺ひて二壘に轟進したるも捕手渡邊の爲めに二壘に刺さる横山三振し船木Pゴロに死す

吾が軍代り攻む 現れ出てたるは唯れぞ好打手加藤なり而かもこのとき吾が軍得点四連合軍得点〇連合軍の苦心や思ふ可し只連合軍として恃むは投手武者の双腕のみさても前途の風雲の急なること武者一捻して投したる球ひゆうと音して三壘齋田左翼小泉の頭上をかすめて後方に遁逸し一舉二壘を奪ふ嗚呼打つたりな加藤!!!汝が強打は永く吾が野球界の花たらむ、吾が軍士氣大に振ふ赤羽武者の妙腕に倒れ不破はバンドに身を殺したるも加藤を本陣に入る町田Pゴロを送り屍を一壘に晒す

第五戦

平手味方の苦戦に憤然と現はれフライを1Bに送り海邊の悪球にて一命を存せしも二壘に脱鬼の如く馳せ行くに及んで捕手が好球と海邊のモーションニよりて屍を晒す小泉栗田がスローボールにて弄せられて死し藤村栗田が球を見事打つてSSに強ゴロを送り町田の悪球の爲めに一壘を得たり剛漢武者が怒棒も効なくPゴロに死し藤村スタンディングとなる

第六戦

吾が軍攻む 栗田Pゴロに、鈴木一壘のフライに死し渡邊は三振に倒れて五戦終る

彌々最終の決議に入り北辰校庭砲煙に覆はれ叫喚四方に起りて殺氣空に漲る連合軍大勢を盛り返へすはこの一戦と諸將奮闘して金子がPゴロに出でしがPノミスに助りて一壘に入る山田は1Bにフライを送つて死す此の時早く彼の時遅く輕敏なる不破見る間に金子を一壘に殺してダブ

ルプレーの名聲を擧ぐ味方のダブルプレーの斬死に怒氣を含める好打手齋田味方の耻辱を雪がんと計りに打つたる球は憂然と鳴つて遠く中堅と二壘の間に飛行す守將誰れぞ敏快と知られたる好漢藤崎何んぞ猶豫の有る可きぞ發止と計りに止めて一壘に致せしかど既に遅く齋田一壘に突入吁兩氏が妙技真に神に入るもの敵も味方もあつと計り觀衆爲めに酔へるが如し次ぎに横山ツウストライクを算ふる頃齋田走つて二壘を奪ひ宿將渡邊が隙に乗じて將に三壘に迫らんとす時に横山ツウストライク。ボールスリーを算す若し此の時ボールを投せんか敵に四球の利を與へて壘を奪はれん横山にセーフヒットを打たれんか敏快なる齋田に一舉本〇を突かれん全軍の運命は集まつて投手栗田が一投球に有り此の危険なる投球は今しも栗田か手を離れぬ」と見る間にストライキーと高らかなる審判の聲四邊に

響きぬ何んぞ其の投球の巧妙なる今更ならねど
驚くの外なし

吾が軍攻む 海邊三振に倒れ藤崎がPゴロ加藤
はSSのフライに死すに及んで戦終はる連合軍は
スコングの大敗を招きぬ

當日の打撃順及びインニングを示せば

連合軍	四高軍	軍高四	連合軍	連合軍
0 1	2 1	鈴木邊	11B	11B
0 2	0 1	渡邊	C	11B
0 3	0 1	海藤	RF	CF
0 4	0 1	加藤	LF	RF
0 5	0 0	赤羽	1B	LF
0 6	0 0	不破	SS	1B
0 7	0 0	町田	P	SS
0 8	0 0	栗田		P
0 9	0 0			
0 10	0 0			
0 11	0 0			
0 12	0 0			
0 13	0 0			
0 14	0 0			
0 15	0 0			
0 16	0 0			
0 17	0 0			
0 18	0 0			
0 19	0 0			
0 20	0 0			
0 21	0 0			
0 22	0 0			
0 23	0 0			
0 24	0 0			
0 25	0 0			

安全球	連合軍	四高軍
死球	一	二
三振	一	三
振球	十	五

再び南下問題について

遂に來り！曰く、

一、柔道、擊劍の兩部は四月三日迄ならば試
合を承諾仕べく候、前便に申上候ひし通り
四月初より退引ならぬホートの練習有之候
へは四月已後に試合を行ふ事は残念ながら
不可能に御座候
一、野球部は己に明年四月に東京遠征の計畫
有之撰手は四月一日より上京仕るべくに付
春休みに試合を致すは六ヶ敷候、貴校撰手
諸君にして若し三月の末に本校試験終了後
御入浴せらるゝ時には生等は喜で御迎へ仕
るべく候
一、庭球部は幸ひ春休中は故障無之候へば早
速承諾致すべく候
右の様都合にて貴校に差支へなき時は御手
數ながら柔道、擊劍撰手の人數及び庭球撰手
の組數を御報知下され度候、先は御返事まで
早々

明治三十九年十二月六日

第三高等學校藏水會四部理事連名

附録

方言について (承前)

附 (金澤市の方言輯)

へ、な、生

方言

解義

たもや	本家	たかつあん	主人を呼ぶに用ふ、但し上流には通用せず
たねど	尻	たか	ヲトッサン、商人の主人を呼ぶにも用ふ
たこ(く)も	漬菜	オッカサン、商人の妻な	どを呼ぶに用ふ
たこじよ	毛虫の類	オカミサン、商人の妻	なを呼ぶに用ふ、但若き者に對して用ふる事なし
たこんこ	熬粉	オクサン、と云ふが如	し又だ、いと云ふ、
たちやばやし	オベッカ、此の言葉には	オデサンと云ふに同じ、	無論伯父にも用ふれど
	必ずコクといふ言尾を		も一般年長者を呼ぶに
	用ふ		使ふ
たゆづけ	粥	たじやん	下等社會にて多く用ゐ
おかべのから	豆腐のから	たいさん	られオツカサンに同じ
たういん	狼	たッさん	僧侶の妻を呼ぶに用ふ、
		たッさま	オクサン、と云ふが如
		たどりや	し又だ、いと云ふ、

たうどな
れぞい
れぞつけない
たろかな
れかつせ
れひんなり
たすんまり
わやく
わ
れ
が
め
かんぼ
がまな
がりんぼ
かたうり
かたね

オマヘタチの意、ささ、
んらともいふ
横着な、大膽な、
粗末
恐る可き、大變な
柔順な、遇な
止めよ
オハヨウ 御起きにな
りましたか。
オヤスミ
ジョウダン
汝、單數なり、複數には、
わらちといふ
龜
妾
横着な、頑固な、
水、又やせ男といふ意
味にも用ふ
シロウリ
ハレモノ、デキモノ
かねこり
かぶそ
かいぶし
かんしよ
かんば
かーか
がっさいな
がっさり
がっしり
がや
かて
かやす
よのみのき
よなが
よぼる

八十四
氷
類
鰯の脯
大便
ハゲ頭
オツカサンと云ふが如
し、下等社會で使ふ
粗末な
大變な
シツカリト
語尾として常に使用す
「わしのがや」の如し、
ワシノデアルといふ意、
ダトテの意味で到る處
に用ふ
返却す、此類甚だ多し
榎
硫黄
夕飯
呼ぶ

よすけむく
ようない
ようはじめに
ようしまいに
だぶつ
たんち
たあた
たか
たんくわもの
たちやい
だららしい
だいな
だいつな
たらす
だずる

目的の外づれること
濟まない
最初にようは最も意
なり
最後に
馬鹿
馬鹿、之れは前のに比
べて少し上品なり、
代名詞として少年少女
の二人物に用ふ
少女の一人稱
上
短氣者
夕方
馬鹿らしい
高慢な 之れは少數に
用ひらる
ハデナ 同上
與へる
ナマケル
たんべたんべに
だいから
だんない
だしかい
だちやかん
そんなり
そら
つつみ
つのだし
ついは
つんと
つんまりと
つまみ
ねんねこ
ねんねば
ねま
なさけない
なめくちり
なごなる

度毎に
根抵から
カマワナイ
カマウモノカ
ダメダ
ソノママ
上方
溜池
蝸牛
杖
殆んど
シンマリト
桑の實
ネマキ
スワル
御氣の毒
蛭蟪
寝る、長くなるの意、
八十五

なわぬく

なんぞげに

なかで

なあーむ

なあもなーも

らちやかん

むさんこな

むけんぱち

むてんに

むけっしよな
むぎっしよな

うろ

うら

うさんな

うぞくらしい

のぼす

のた

仕事の一部を畧す事

粗末に

款中

否

否々然らず、
だちやかんと同じ意味

なり

亂暴な

額

ムヤミニ、ヤタラニ、時
にはてんむてんにとも

いふ

無骨な

水中の横穴

余

ウロンナ

イヤナ

間抜け
海岸の波

くさい

ぐすな

ぐわち

くめ出す

くそんたご

やまべた

やませ

やんちやな

やくちやもない

やとこさいに

やあや

氣にくわぬと云ふ意味

なり、又ラシイといふ

意にも用ゐらる「ダラ

クサイ」の如き然り

横着な、此の意味より

轉じてグスコクとは學

校を欠席する事なり

吸みだす

自慢

便所、たごは桶といふ

意なり、ちよけんたご

とは小便所の事なり

燒團子

東南の風

スカミソ

亂暴な、キタナイ

タワイモナイ、ワケモ

ナイ

辛うじて

然り、諾せり

やろ

や

ま

まつ

まい

ま

まい

ま

まい

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ダロウの意 ソウヤロ

ウの如し

ダの意なりソウヤク

の如し

マア(感)

類

眉、多くは小供が使用

す、

マボシイ

オタベナサイ、老人が

使ふ

未位、尻、げどくそと

も云ふ

消し炭

好人物

二百三高地、オデコ

篩

奇妙な

けなぐさい

けなるい

ふるだな

ご

こんか

こんかあめ

こそ

こそがき

ごねむく

ごなる

ご

ご

こ

こ

こ

こ

こ

こ

キナクサイ

ウラヤマシイ

戸棚、袋棚の意ならん

啞

小糠

細雨

私窩子

細い筆、シンカキ

死ぬ、罵りの意あり、

こねむけはくたばれの

意

人の泣くのを嘲笑する

時に云ふ言葉なり

抜く

キノコ

ゴメンクダサイ

御丁寧様、主に計算上

に用ふ

繪馬

下水

八十七

えみぞ
ねんばな

てき

てもすり

てんごう

あッは

あをくさや

わぼす

あるば

あるばげ

あ い

あちやこちや

あぐち(ち)かく

あぢち

あかにし

あ ま

あしめにする

あ ば

不運な

アレ

悪戯

糞

八百屋、荒物屋、を四

十物屋といふ

馬鹿 主ニ小供が用ふ

油

油揚

東北風

アベコベ

胡坐かく

分家

客齋家

家根裏の物置

アテニスル

老年の下女を呼ぶに用

ふ、乳母といふ意もあり

あ っ ち や

あ ん ま

あ ん か (こ)

あ ん さ ま

あねさん

あねさま

あ こ

あ ね ま

あてがいな

あ け ない

あせくない

あ い そ む ない

あぐるしい

あ だ ける

あ くれ る

彼の奴の意、キヤツ

アツチ、彼方の意

ニイサンの意、併し已

れの兄にのみ止らずし

て誰れでも壯年の者を

斯く云ふなり、而して

あんなさまは多く女が男

を呼ぶに用ふ

若きたかみさん

アソコ

ネーサン

杜選な

荒ッぽい

多忙

ソ、ツカシイ

愛想ない

窮屈な

騒ぐ

遊にふける

あめやふる

あ っ かり した

あ れ ぐ

さるこぼんば

さまたれ

さいふり

さばさし

さ ん ま

さじぎじ

さりわら

さやんどん

さやんこ

ささじ

さみあい

め め る

雨降る、此類甚だ多し、

例へば雪降るをゆきや

ふると云ひ虹立つをに

じやたつと呼ぶが如き

然り

ガツタリシタ

歩く

肩車

醜態

ハタキ

出刃庖丁

サンスケ

ツムジ

タワシ

蛙

オタマジヤクシ

風の玉子

セセリアヒ、競走の意

ナラム

めんちや

みのうり

しんばれ

じろあめ

じぶさ

しようち

じやーじや

しなしなど

しようず

じようろさん

じ い じ

じやあま

じ っ くり と

しやんと

してまた

したつて

下賤な女及び鳥獸の雌
をいふ
マクワウリ
シモヤケ
水飴
雑巾
小路
雑炊
漸々に
泉
御嬢さん
ダイサン
母及び年寄の女を呼ぶ
に用ふ、併し主に下等
社會に用ひらる
篤と
食物の味のアツサリし
たのをいふ
勿論、無論

しましやるな
 ひふだけ
 ひよ、り
 ひどつけない
 ひねくらしい
 ひよこと
 ひぼつける
 もうか
 もぎしない
 せど
 せわだいと
 せごかすき
 せんば
 すこ
 すいこさり
 すこてん
 すこかぶり
 すきちら
 すかたん

スルナ、止めよ
 火吹竹
 蟬
 ムゴタラシイ
 オトナノヨウダ
 突然に
 苦情を云ふ
 バケモノ
 磊落な
 庭
 一生懸命で
 佝僂
 火取り
 頭
 ノボセモノ
 頰冠
 頂
 目的の外れた事

すこたん
 すだつ
 すだめ
 すてんば
 すいらく
 んな
 腹掛
 綿密
 出鱈目
 横着
 皆

此他接續詞、語尾等に於ても奇妙なるもの少しとせず、即ちかてて(……と雖もの意)き(か)「そうきの如し」さかい(から)じや(である)た(とか)まっしやい(なさい)みす(ます)やろう(ならん)とこ(……して置け)の如き然り、又覗くをのすく、有難うをあんやと抓るをちめると云ふが如き訛りは今一々此處には擧げず、以上は余がこれまでに理解し得たりと信ずるものゝみなれども察するに九牛の一毛にも及ばざる可し、かくの如き方言各地方に散在して吾人が日常の生活に不便を與ふるは決して喜ぶべき現象にあらず、されば教育の普及と交通の發達とによりてこの弊害の一日も早く消滅せんことを望まざるを得ざるなり

投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雑誌上には雅號のみを記載することを許せごも姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治三十九年十二月十六日印刷
 明治三十九年十二月二十日發行

編輯兼發行者 吉村政行
 印刷者 沼倍男
 印刷所 明治印刷株式會社
 發行所 第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地
 同縣同市穴水町二番丁廿九番地
 同縣同市高岡町九十番地

